

目 次

明治学院大学 ボランティアセンター報告書 第17号 2020

学長挨拶「人と人の絆の大切さ」村田玲音.....	1
ボランティアセンター長挨拶「一年の務めを終えての所感」小川文昭.....	3

特 集

「学生のボラセン」を目指してー明治学院大学ボランティアセンターの20年ー

明治学院大学教養教育センター教授、ボランティアセンター長補佐／猪瀬浩平	5
---	---

I. 2020 年度活動報告

2020 年度ボランティアセンター行事一覧.....	11
2020 年度ボランティアセンター事務室から／2020 年度来室者数.....	12

<全学プログラム>

1 明治学院大学ボランティア大賞	14
総括	
大賞「心理学的支援に基づく日本に住む外国人へのボランティア実践」	
心理学部心理学科3年／大出結喜.....	16
研究部門賞「戸塚区生活センターでの傾聴ボランティア～ひとりの人として関わる障がい者支援～」	
心理学部心理学科3年／矢嶋祥伍.....	19
実践部門賞「外国人と日本社会～外国人労働者と家探し～」 経済学部経済学科3年／天野萌.....	21
2 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム.....	23
総括	
修了生の報告	
「ノートテイクと経済学からみるボランティアのサボリへの対処法」 経済学部経済学科3年／清水琴詠.....	27
「経営学の学びと食糧問題」 経済学部経営学科3年／大塚麻奈	29
「音楽の贈与と犯罪抑止としてのオーケストラ」 社会学部社会学科3年／亀田百花.....	31
「人々がマイノリティであると感じない社会へ」 国際学部国際学科3年／椎名里帆.....	33
「ボランティアが生み出す循環」 国際学部国際学科3年／松山舞香.....	34
「障害のある方とのコミュニケーション」 心理学部心理学科3年／伊藤遥音.....	36
「障害のある子への地域支援」 心理学部心理学科3年／笠本楓夏	38
3 教育ビジョン・ボランティア教育連絡会議「パヤオプロジェクト」	40

<ボランティアセンター主催プログラム>

4 ボランティアファンド学生チャレンジ（通称：ボラチャレ）	41
総括／2019 年度助成企画	
エシカルファッション（MGCloset）	42
海洋保護プロジェクト（MGU Sea Turtle）	44

対話 Open Dialogue (18psychology)	47
郡上おどり in 戸塚学生プロジェクト (チーム MG 郡上)	49
ボランティアファンド学生チャレンジ 2020 採択団体一覧.....	50
5 いつでもボランティア・チャレンジ (通称: いつボラ)	51
コロナ禍でも安心! ぬいぐるみ旅行で旅行気分! (りもぐるみ)	
6 1 Day for Others (1 日社会貢献プログラム)	54
1 Day for Others 2020 参加者数/これまでの参加者数とプログラム数.....	64
7 ボランティア・カフェ (通称: ボラカフェ)	
7.1 おうち de ボラカフェ報告.....	65
7.2 秋のボラカフェ報告.....	68
7.3 ボラカフェ・クリスマス	71
<外部団体との協力・連携>	
8 夜のおうちでボラカフェ	
「コロナと暮らし、ボランティアと正しさ」主催: NPO 法人 ESUNE	72
9 「ボランティア学」授業との連携について.....	73
明治学院大学教養教育センター教授/猪瀬浩平	
10 「ジェンダーとメディア表現」イベントの開催	75
企画監修: 長谷部美佳 (明治学院大学教養教育センター准教授)	
共催: (公財) 横浜市男女共同参画推進協会、明治学院大学 (学生団体) 海外プログラム事業部	
11 「大学生による国際協力」主催: 大学教職員有志、協力: ミタイ・ミタクニヤイ子ども基金.....	78
12 「市民とつながる海外体験学習～オンライン実践からこれからの体験学習を考える」	79
主催: 大学教育研究フォーラム実行委員会	
13 国際機関実務体験プログラム	80

II. ボランティアセンター資料

ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま	81
2020 年度マスコミ報道一覧.....	81
2020 年度各委員一覧.....	82
明治学院大学ボランティアセンター規程.....	83

学長挨拶

人と人の絆の大切さ

昨年暮れに、岩手県大槌町の平野町長が本学を表敬訪問されました。10年前の東日本大震災以来、明治学院大学は大槌町と協定を結び、吉里吉里地区を中心に各種の交流を継続的に行っています。明治学院大学のボランティア活動は、1995年の阪神淡路大震災をきっかけにして組織的な取り組みが始まりました。そして、規模や人数の面から見て際立っているのは、東日本大震災における大槌町（特に吉里吉里地区）での活動でしょう。

私は震災・大津波のあった翌年、2012年の秋に初めて大槌町へ行く機会がありました。当時私は入試担当副学長をしており、震災で大変な状態になっている教育について現状を伺い、今後を考えるためでした。当時の教育長だった伊藤正治さんとお会いし、色々なお話をしました。伊藤さんの案内で大槌町のあちらこちらを見て回ったのですが、地震・津波・火災に襲われてからまだ一年半しかたっていない頃で、海岸近くの光景は鬼気迫るものでした。

伊藤さんからあの日の様子や現状、これからの展望について色々とお話を伺いましたが、そんな中で私がふと、「今後への展望や構想の中で、私たち外の人間にどんなことを望んでいらっしゃいますか？」とお尋ねしたのに対する伊藤教育長の返事が、今でも強く心に残っています。「震災以来、お金も物も、たくさんいただきました。ある意味、もう十分です。ただ、外から忘れ去られてしまうのが怖い。人間同士の絆をずっと繋げておきたいんです」

この言葉を聞いて私は、様々なチャンネルで絆をつなげておくことの重要性を痛感しました。こうした話の中から大槌高校を明治学院大学の指定校にする案が出てきて、これは間もなく実現しました。あれから8年たって、大槌高校から推薦入試で明治学院に入ってきた学生は4名になりました。つい先日、伊藤さんから頂いた手紙によれば、卒業生の中には、ふるさとの復興にかかわる生き方を選択された方もいるそうです。

私はボランティア活動の大切な点は、人と人の絆をつなげることではないかと思っています。世界は昨年、新型コロナウイルス感染症に翻弄されました。コロナ禍がもたらした最も大きな災いは、人と人の繋がりを阻害してしまったことではないかと思います。順調に続いてきた明治学院大学の東北での活動も、2020年度は少しブレーキがかかりました。そうした中で、大槌町と本学の間の協定が昨年、いったん期間満了を迎えました。この先、どのようにしていくのか大槌町とも相談をしましたが、ぜひ継続しましょう、可能性があったら交流の幅をもっと広げていきましょう、ということになりました。昨年秋の平野町長の来訪は、こうした双方の意思を直接会って確認しあう意味もあったのです。平野町長と直接お会いして色々な話を交わすと、書面のやり取りだけでは実現できない人と人の繋がりを感じます。

昨年のボランティアセンターの活動は、コロナのために大きな制約を受けました。そうした中でも、例えば『ボランティア・サティフィケート』を獲得した学生さんたちは、コロナの不自由さの中で、どうやってボランティアを拡げていくかについて様々な工夫をしていました。これは本学のボランティア活動の新しい拡がりを感じさせるものです。

今年のボランティアセンター報告書は、二つの意味——「コロナ禍がボランティア活動にいかにかに大きい爪痕を残したか」と「コロナ禍の中でどんな形で活動が続けられたのか」を知ることができる、貴重なものになるのではないのでしょうか。

2021 年度以降、コロナが早く収まり、心置きなくボランティア活動をふたたび盛んにできる日が来るのを祈っております。

2021 年 3 月

学長 村田玲音



大槌町との協定のため平野町長がご来訪下さいました

ボランティアセンター長挨拶

一年の務めを終えての所感



わたくしが大学生だった頃、社会課題を自分のこととして意識しているような学生は、政治活動の道を選ぶことがほとんどではなかったかと思います。しかし当時は、大学の学園闘争が終息し、さらに連合赤軍事件などがあったために、そういう学生はすでに例外的な少数者でした。「あっしには関わりのねえことでござんす」というセリフで「木枯し紋次郎」というテレビドラマが人気を博していた時代です。私も自分のことで精一杯で、社会課題に目を向けるということをしませんでした。

最近「ガクチカ」という言葉を知りました。学生時代に力をいれてやってきたことは何ですかという、面接でよくされる質問のことだそうです。私もその質問を受けたことがあり、聞かれてから振り返ってみると、自分の学生生活は、進路の見通しがつかない不安の中でこれからどうしたらいいかを探ることに終始していました。質問に真面目に答えれば、最も力を入れていたことは自分の将来を考えることになりましたが、これはおおよそ若い人のすべてに共通していることであろうと思います。そのうえ、これは目に見えない内面の話にすぎず、表面的に見てみれば、自分は大学で単位を取りながら日常の小さな楽しみを追いかけるといって生活をしていただけでした。部活その他、話題として聞いてもらえるようなことはなにもしていませんでしたから、やむなく、ガクチカの質問には、それなりに一所懸命に働いた新聞社でのアルバイトの話をしてお茶をにごしました。

ボランティアというのは英語由来の語のようですが、英語の volunteer には志願兵の意味があります。太平洋戦争時、父は大学生の身分で海軍の予備学生制度の呼びかけに応じて志願をしたそうです。父の父も兄も海軍の軍人だったので、戦争中に海軍に志願するというのは特別なことではなかったと言っていました。これが英語でいう volunteer です。

このように国家・社会の側からの、人手不足を補う手段としてのボランティア募集は、戦時でなくとも危急の際にはあることで、阪神・淡路の震災後には、文部科学省からボランティアに単位を認める措置をとることを考えてほしいという文書が大学に来たそうですし、東日本大震災の時にも同様の文書が文部科学省から大学に来ました。大学生がボランティアに参加しやすい環境を作ってほしいということです。

一般に仕事には、それが外から要請されているという側面と、自分からそれを望んで引受けるといって側面があり、仕事により、また人により、どちらの側面が大きいか違います。ボランティアというのは、それを引受ける理由が百パーセント自分の内面にあるという仕事のことだろうと思います。

ほかからの要請に応じて働いて成果を出した場合は、その分の報酬を求めて当然ですが、他方、これは素通りできない問題だと感じて自分から選んで取組んだ課題で成果を出したような場合は、課題と取組めたこと、解決できたことそのものが報酬であり、そのことで他人に褒められたりしたら、かえって困惑するということもあるでしょう。

2016 年から始まった本学のボランティア・サティフィケートは、大学の単位がそれで得られるという現実的な利益につながるものではない学習活動を、学生がみずから選んで継続することを奨励するために、大学全体で学生ボランティアを支援しようという、これまでになかった制度です。単位にならない学習活動であるため、参加する学生の数には限りがあることと思いますが、これもまた本学の理念を示すという意義を担う制度として、今後も継続されていくことを願っています。

2021 年 3 月

ボランティアセンター長 小川文昭

特 集

特集 「学生のボラセン」を目指して －明治学院大学ボランティアセンターの20年－



猪瀬 浩平

(明治学院大学教養教育センター教授
ボランティアセンター長補佐*)

*2020年11月当時、現センター長

1 明治学院大学ボランティアセンターの設立経緯

1995年に起きた阪神・淡路大震災とそれがもたらした大きな被害に接し、明治学院大学でも多くの学生たちがボランティアに立ち上がった。学生たちは明治学院と縁が深い賀川記念館(兵庫県神戸市中央区)を拠点に活動を展開し、大学に残った学生・教職員の有志がそれを支えた。一連の活動を経る中で、明治学院内部でボランティアセンターを設立しようとする機運が高まり、1998年に学校法人明治学院のボランティアセンターが設立された。同センターは、翌年に明治学院大学ボランティアセンターに改組された。

本学の創設者ヘボン(ヘボン)は幕末の日本でキリスト教精神に基づいて無償の医療活動や、「ヘボン塾」での教育活動、聖書翻訳、和英辞典の編纂などの数多くの社会貢献活動を行った。このようなヘボンの志が、キリスト教主義に基づく本学の人格教育を通じて、賀川豊彦をはじめとする明治学院で学ぶ多くの学生たちに引き継がれた。そして阪神・淡路大震災にかけつけたボランティア学生のエネルギーに促される形で、学生たちの自発的活動を支える拠点としてのボランティアセンターが構想・設立された。

2 明治学院大学ボランティアセンターの20年

明治学院大学ボランティアセンターは、まず横浜キャンパスに設置された。教員が兼務するセンター長と、専任のコーディネーター1名、学生スタッフが運営にあたった。2001年には白金キャンパスにも、ボランティアセンターが設置された。

学生スタッフ(後に学生メンバーに改称)は当初、学生コーディネーターとして一般学生のボランティアをサポートする役割を担っていた。やがて学生スタッフはボランティアセンター内の学生セクションとして位置付けられ、横浜・白金キャンパス周辺地域での活動や、学外のNPO・NGOなどと連携した活動を始めていった。

ボランティアセンターは2001年からソニーマーケティング株式会社と連携した「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」の運営や、2005年からは横浜に拠点を置く国際機関

でのインターンプログラムである「国際交流・協力機関体験・研修プログラム（現「国際機関実務体験プログラム）」の運営を行うなど、学外の組織との連携業務を展開してきた。2007 年には、ボランティアファンド学生チャレンジ賞を創設した。これは本学学生のボランティア精神を支援し、自発的な社会貢献活動を促進するための助成金である。大学ロゴの入った「明学グッズ」の売上金の 10%を原資とし、学生が企画した社会貢献プロジェクトに対して奨励金を支出すると共に、ボランティアセンターとしてプロジェクトの実施に向けたサポートを行う。

2011 年に東日本大震災が発生すると、発生直後から岩手・宮城の両県で「Do for Smile@東日本」プロジェクトとして緊急支援活動を始めた。その後、岩手県大槌町では吉里吉里地区を拠点に、子どもの遊び場づくり、学習支援、地域コミュニティづくり支援などの活動を展開してきた。同じく陸前高田市では小学生のためのスタディツアーを企画するとともに、地元の祭の運営を手伝うなどの地域活動を行った。宮城県気仙沼市でも復興支援プログラムを展開していた。

2011 年秋には、1 日社会貢献プログラムである「1 Day for Others」が始まり、初年度は 23 プログラム 245 名が参加、以後プログラムは拡充し、2019 年度には 82 プログラムが実施され、662 名（延べ）が参加している。当初のキーワードは「ボランティア・スピリット」と「社会課題の解決」であり、学生の受け入れ先はボランティア団体や、NPO・NGOだけでなく、社会起業や、CSRに取り組む企業も派遣先となっている点に特徴がある。

3 ボランティア実践と大学教育との連携

2016 年度からは、ボランティア実践と大学教育を融合させる全学的な取り組みとして、「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム（以下、サティフィケイト・プログラム）」が始まった。このプログラムは、①135 時間以上のボランティア実践、②ボランティア実践と結び付けて学びを深めた授業の単位取得、③ボランティア実践と、大学での学びを結びつけるための手掛かりをつくる「インテグレーション講座」を受講した学生にサティフィケイト（修了証）を授与する仕組みである。学生の自発性を重視する観点から、ボランティア活動自体の単位化はせず、すでに大学で提供されている教育とのつながりを強化することで、学生自身の大学教育の中での学びとボランティア実践双方を深化させることを目指している。ボランティアセンターが、学生のボランティア実践についてのサポートを、ボランティアセンター運営委員を務める学部・教養教育センターの教員が、ボランティア実践と大学の学びを融合させるための指導を、それぞれ行う。認証初年度である 2018 年度には 12 名、2019 年度には 11 名が認証を受けた。また、サティフィケイト・プログラムに関連し、ボランティアと大学での学びを結びつけた学生の成果を発表する「学びに基づくプレゼンテーション大会」も 2016 年度から実施してきた。

サティフィケイト・プログラムを展開する中で、参加する学生同士が学年を超えて学びと実践の双方で刺激し合うとともに、これまでボランティアセンターと直接的な関わりのなかった教員たちとも連携する体制が徐々に生まれつつある。ボランティアと大学教育の融合を教員自身が考えていくことは、本学の教育理念 Do for Others を具現化していく意味でも重要であると考えている。

4 現在のボランティアセンターの教職員体制

ボランティアセンターでは、設立当時から学生をサポートする専門職員として、ボランティア・コーディネーターが配置されている（2020年9月現在、常勤2名、非常勤1名）。コーディネーターは、専門的知見を生かしてボランティアを実施する学生の企画をサポートするだけでなく、外部のボランティア団体、NPO・NGO、行政などとのネットワーク作りや、学生たちが実践を通じた学びを深めるためのサポートをしている。ボランティアを「良いことをした」で終わらせるのではなく、それぞれの活動がなぜ行われているのか、その活動が解決を図る社会課題はどんな背景の中で生まれていくのか、その活動の支援が届いていない人はいないかボランティア実践の中で生まれる問いは尽きることがなく、またその問いに向き合い続ける中で世界に対する問題意識を高めていくことが大切である、と私たちは考えている。

ボランティアセンターの活動が活発に展開される中で、事務職員も増員されてきた。大学全体のガバナンス、教学マネジメントや広報、キャリア支援などの専門性をもったスタッフが配置されることにより、ボランティアセンターの活動は、大学全体の活動との有機的なつながりを深めている。

センター長やセンター長補佐は教員が務めるとともに、各学部・教養教育センターからそれぞれ1名の運営委員が出され、重要事項について審議をしている。また、外部の有識者に活動推進委員としての助言を受けている。



ボランティアセンター20周年 パネル展示

5 ボラセンの学生を増やすのではなく

ボランティアセンターでは、20周年を迎えるにあたってこれまでの活動を振り返り、2018年度の基本方針として以下を定めた。

ボランティアとは、プログラム化された無償奉仕活動への参加だけを指すものではない。あらゆる職業、研究・勉学、日常生活にボランティア・スピリッツの要素は存在する。社会生活の多様な場面で他者への貢献を考えることのできる人材育成こそ、本学の教育理念である。

この理念を具現化するために、大学内外のあらゆる関係者が「他者への貢献を考える」ことについて交流・活動する場を提供していくこと、それにより、一人一人が社会課題と出会い、

向き合い、ともに考える中で、自分が変わり、社会を変えていくことを目指す。

ボランティアセンターとして多岐にわたる活動を展開する一方で、私たちの意識がどこかでボランティアセンターに学生を囲い込む形になっていた。この点を反省し、「ボラセンの学生」を増やすのではなく、「学生のボラセン」となること、さらに教職員や、卒業生・修了生・地域の方々にとってのボラセンを目指すことを確認した。

本学において、ボランティアセンターの学生セクション以外にも多くのボランティアサークルがある。そればかりではなく、20 周年の記念行事を準備する過程で、ボランティアを活動目的としない多くの体育会系・文化系サークルがボランティア活動を行っていることや、ゼミなどが授業を通じて社会課題に取り組んでいる実態が明らかになった。このような、明治学院大学全体の「ボランティア力」を可視化し、またその連携・協働を促すことが、ボランティアセンターが担うべき役割である。

このような認識のもと、2019 年度に「いつでもボランティアチャレンジ（略称いつボラ）」が創設された。本学在学中の学生・院生が、自ら企画したボランティア（社会貢献）を実践したいと思った「その時」に申請できる援助金制度である。2007 年に始まった「ボランティアファンド学生チャレンジ賞（略称ボラチャレ）」は年 1 回 11～12 月に応募・選考を実施してきたが、これでは災害発生時の支援など、学生がボランティアをしようと考えたときに即座に対応するのが難しい。いつボラはいつでも申請ができ、申請があり次第ボランティアセンターのスタッフで面談を実施して、助成の可否を判断する。初年度である 2019 年度は 8 件の申請があり、面接の結果 6 件（総額 14 万 7027 円）の助成を決定した。分野としては、聴覚障害者理解、海外支援に関わるものが 4 件、障害者支援に関わるものが 1 件、災害支援に関わるものが 1 件となっている。助成するに至らなかったプロジェクトについても、実現できるように引き続き相談に乗っている。

ボランティアセンターを活用する学生を増やすための方策をとる一方で、ボランティアセンターの学生メンバーとしてきた「学生セクション」はボランティアセンターから独立させた。これまで、学生メンバーはボランティアセンターを通じて大学施設が他の学生に比べて自由に使えていた一方で、ボランティアセンターの業務に学生メンバーを動員してしまうという問題があった。また、学生メンバーを囲い込む形にすることが、学生メンバー以外の学生にとってボランティアセンターが近づきにくいと思う要因の一つとも考えられた。2020 年度からは、ボランティアセンターの業務に関わる「学生コーディネーター」を有償で置き、ボランティアセンターを学生目線によって、より開かれた場とすることを期待している。

これらの仕組みの見直しを行うとともに、ボランティアセンターの活動スペースを白金、横浜の両キャンパスで拡充させている。

6 今後の展望：コロナ禍のなかで

コロナウイルス感染症の拡大の中で、ボランティアセンターでは、2020 年 3 月に対面でのボランティア活動の中止・延期と、オンラインを活用した活動・話し合いを学生へ要請するメッセージを出した。年度が変わってからは、オンラインでのボランティア相談窓口を開設するとともに、ボランティアや社会課題について考えるイベント「おうち de ボラカフェ」を開催し

た。10年目を迎える1Day for Othersも春学期については中止、秋学期についてはオンラインで実施できるプログラムの実施を検討している。本学では秋学期からは対面授業も一部開始されるが、ボランティアセンターでは感染防止策を講じながら、すでに夏休み前から学生と対面する業務を始めている。

さらに、2016年度から実施してきた学びに基づくプレゼンテーション大会を発展的に解消し、「明治学院大学ボランティア大賞」を創設した。これは大学の学びを深めながら、社会活動に向き合ってボランティア活動を行い、学びと実践の双方で優れた成果を上げた活動を表彰するもので、大賞のほか、研究部門賞や実践部門賞などを置く。コロナ禍に直面した現在、社会課題は複雑さと深刻さを増している。今ほど、「他者と共にある営み」としてのボランティアの意味が問われる時期はない。学生がボランティアを通じて手に入れた「市民知」を発信し、明治学院大学の内外でボランティア・スピリッツを持つ全ての人々を励ますことを期待している。



20周年 学生企画集合写真

* 本稿は『大学時報 No.395』2020年度11月号特集「大学ボランティアセンターの役割とこれから」より転載させていただきました。

I . 2020 年度活動報告

2020 年度ボランティアセンター行事一覧

4 月	
5 月	おうち de ボラカフェ開催 (2 回) 2020 年度第 1 回ボランティアセンター運営委員会
6 月	おうち de ボラカフェ開催 ボランティア学生チャレンジ 2019 中間報告会
7 月	おうち de ボラカフェ開催
8 月	
9 月	ボランティア・サティフィケイト・プログラム ガイダンス開催 (2 回)
10 月	ボランティア・サティフィケイト・プログラム ガイダンス開催 (3 回) インテグレーション講座 (登録 1 年生対象) (4 回) 秋のボラカフェ開催 1 Day for Others 秋 開催 (1 件)
11 月	秋のボラカフェ開催 ボランティア・ファンド学生チャレンジ 2020 募集 第 1 回「ボランティア大賞」 インテグレーション講座 (登録 1~3 年生対象) 2020 年度第 2 回ボランティアセンター運営委員会 1 Day for Others 秋 開催 (2 件)
12 月	ボラカフェ・クリスマス開催 1 Day for Others 秋 開催 (3 件)
1 月	
2 月	1 Day for Others 秋 開催 (2 件)
3 月	1 Day for Others 秋 開催 (2 件) ボランティア・サティフィケイト・プログラム 修了式 2020 年度第 3 回ボランティアセンター運営委員会

2020 年度ボランティアセンター事務室から

ボランティアセンター（以下ボラセンと記述）では、以前より白横間連携の希薄が問題視されていて、オンラインによるセンター内常時接続が構想されていた。その矢先に新型コロナウイルスの感染があり、2020 年度は学内全体でのオンライン対応が必須になっていった。ボラセンではコロナ以前よりオンライン接続を課題にしていたことも幸いし、学内でも早い段階でオンライン対応の定着があったと感じている。結果として 2020 年度のイベントほとんどをオンライン化せざるをえなかった状況に対し、比較的周到に臨めたと思っている。

新型コロナウイルスは新学期ガイダンスを始めとし、1 Day for Others、ボランティア・サティフィケイト の新年度対応、外部団体との連携等々、対面による従来のやり方全てを見直させることになった。あわせてコロナ蔓延の状況下で、学生に対しボランティア活動そのものの向きあい方など「考え方」を示す必要もあった。ボラセンは 2020 年 3 月に大学 HP 上に「新型コロナウイルス感染症に伴うボランティア活動についての考え方」を掲出。現在も尚、内容を更新しながら学生にボランティアに対するアプローチについて発信し続けている。

既存プログラムの 2020 年度の状況それぞれに触れてみると、

- ・1 Day for Others：オンラインでの実施のみとし、開催数も「10」に留まる。例年だと 70 前後のプログラム実施のため大幅減となった。内容も講義形式のものが多くなっている。
 - ・ボランティア・サティフィケイト：エントリー/インテグレーション講座ともに従来開始時期の春ではなく秋学期からの開始とした。また修了年次生のボランティア活動時間（要件）についても学内承認を得て特例を施し、2020 年度に限り 135 時間を 67 時間に緩和。但し、修了予定生のほとんどが緩和前の時間を以て申請していたことには触れておきたい。
インテグレーション講座も（学部分科会も含め）すべてオンラインで実施。
サティフィケイト・プログラムの遂行そのものが危ぶまれたが、オンライン活用で学生のサティフィケイトをしっかりと補完した。
 - ・ボラチャレ：学生活動報告「中間発表」も全てオンラインとなった。全ての団体のチャレンジ（計画）がコロナ前のものだったため、年度中途の計画変更にも弾力的に応じてきた。しかしながらそれでも活動ができない状況がほとんどとなり、各団体とも予定していたチャレンジができずに終わっている。そのため支援金についても多額の返金が発生した。
 - ・ボランティア大賞：第一回目だったが完全オンラインによるプレゼンテーション大会になった。教職員を含め 78 名が参加。選考/表彰込みの長時間イベントにも関わらず、ミス無く終えている。コロナ禍の中でも活動を続けられた学生と、スタッフのオンラインスキルも含め、ボラセンに関わる人たちの総合力に支えられたイベントになった。
 - ・災害遠征助成金 申請「0」。コロナ禍の影響もあるが、災害時のボランティア募集が地域限定となる現況において、この制度は再考が必要かもしれない。
 - ・国際機関実務体験プログラム 2020 年度夏・春派遣ともに中止。2021 年度も夏中止が決定。
- 他にもボランティアフェスや定例の地域連携全てが中止になっている。またボラセンにおけるピアサポート「学生コーディネーター」も学生来校がほぼなかったため、結果として中途半端に終わった。

上述してきたとおり 2020 年度はボラセン内実務のオンライン変換イヤーだったといえる。学生へのアプローチや、既存のプログラム維持について、オンラインを駆使して、失敗や苦慮を重ねながらその実現に傾注した一年だった。2020 年度は今後様々な場面で振り返られるであろうし、いままでとは異なる経験と蓄積が刷り込まれた年度になったと思っている。

(職員 高橋千尋)

<2020 年度来室者数>

新型コロナウイルスによる影響のため、2020 年度来室者数は前年度に対し、オンライン来室を含めても 1 割強に留まっている。特に春学期 (9 月 20 日まで) 来室者数は、大学に入構制限が引かれていたため、予約学生もしくは他部署に用のあった学生がついでにボラセンに寄った数に過ぎない。

秋学期には一部対面授業が再開したが、キャンパスにいる通常の学生数には程遠く、ボラセンの来室者も連動してあまり増えることはなかった。10/11 月に来室及びオンライン来室者数が若干増えたのは、ボランティア・サティフィケートとボランティア大賞の発表の相談に伴うものである。

ウイルス対応の一環で、新たに Teams を使ったオンライン開室も試みている。しかしながら、平日昼休みに自由にアクセスできる体裁で始めたものの、アクセス数はあまり伸びなかった。そのため現在では完全予約制に変えて残している。

年度	月	来室者数 (白金)	来室者数 (横浜)	年度	月	来室者数 (白金)	来室者数 (横浜)	来室者数 (オンライン)
2019	4	121	745	2020	4	2	15	-
	5	170	613		5	0	0	-
	6	169	559		6	0	0	-
	7	128	451		7	3	4	5
	8	21	66		8	0	0	7
	9	62	356		9	16	56	8
	10	197	718		10	41	102	21
	11	129	716		11	33	72	43
	12	73	501		12	23	73	10
	1	61	307		1	11	14	6
	2	18	44		2	5	22	4
	3	6	12		3	23	19	0
	計	1155	5088			157	377	104

1 ボランティア大賞

本学では「明治学院大学教育連係・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」をはじめ、学生のボランティア実践と、大学の学びの融合を意識した取り組みがなされてきたが、その成果を発表してもらい、学内外に発信していくことで、教育理念である「Do for Others」を具体化していくことを目的に、今年度から設定した賞である。

企画段階では予期していないコロナ禍に見舞われ、ボランティア実践も多くの制限を受けてしまうこととなったので、実施については延期すべきという意見も出されたのだが、学生たちの工夫や苦悩、葛藤など、それも含めてコロナ禍でどう取り組んだのか、私たちの想定を超えた報告がなされることも期待して実施に踏み切った。

■応募資格

- (1) 本学在学生及び本学在学生の団体による活動であること（院生、院生の団体含む）

※ 科目等履修生等は除く

- (2) 教育理念の具現化を図る活動であると言えること

- (3) 応募者・応募団体は1次審査通過の場合、2次審査会で発表を行なえること

※申請者の明治学院大学入学後の活動（個人・団体とも）を審査対象とします。

■申請期間

9月23日（水）～10月9日（金）

■広報

・7月下旬からポートヘボン、ホームページニュース欄、ポスター掲示等を通じて実施

■応募状況

・期間内に個人11件、団体3件、合計14件の応募があった。

■審査

- (1) **1次審査** 応募14件をボランティアセンター運営委員に送り、審査をした。その結果、合計の上位10件について、2次審査を行うこととした。

- (2) **2次審査** 11月7日（土） オンラインにおいて、1次を通過した10件のプレゼンテーションを実施した。

- (3) **最終審査** 11月7日（土） 審査員により合議を行い、各賞を決定した。

■審査結果

【大賞】

「心理学的支援に基づく日本に住む外国人へのボランティア実践～日本語学習支援に至るまでの歩み～」大出結喜（心理学科3年）

【研究部門賞】

「戸塚区生活支援センターでの傾聴ボランティアについて～ひとりの人として関わる障がい者支援～」矢嶋祥伍（心理学科3年）

【実践部門賞】

「外国人と日本社会～外国人労働者と家探し～」天野萌（経済学科3年）

【奨励賞】

亀田百花（社会学科3年）、柴田芽依（社会福祉学科3年）、藤井一真（消費情報環境法学科3年）

初年度ではあったが、主旨をよく理解し、ボランティア実践とこれまで履修してきた科目とを結びつけた申請が多かった。コロナ禍の対応として、例えば、対面での学習支援からオンラインに切り替わり、試行錯誤を重ねている様子や、なかなか対面にしづらい活動など苦心の様子もよく伝わる報告が多かった。また、ほとんどの申請者が複数の活動を実践しており、その意味でも客観的に自分の活動を捉えて説明しているケースが多かった。

その意味も含めて、今回は団体の活動も申請可能としたが、教科に結びつけるといった場合、誰が履修した科目なのか（今回は、いずれも申請代表者の科目と結び付けていた）が曖昧となり、同列の審査は困難であった。今後の課題として、申請者の資格要件なども見直していく必要があると思われる。

その一方で、「現場＝活動」「大学＝学び」と考え、実践をしてきた（している）ことを大学で学ぶ教科で理論的に説明をしたり、課題の背景を理解する意識は、多くの申請者も、私たちボランティアセンター側も共有されていると思うが、現場での「学び」を帰納法的にフィードバックしてみる視点にも着目していいのではないだろうか。

（ボランティアコーディネーター 菅沼彰宏）



ボランティア大賞 表彰式

【ボランティア大賞】

心理学的支援に基づく日本に住む外国人へのボランティア実践

心理学部心理学科3年 大出結喜



1 日本語学習支援活動に至るまで

私は「ボランティア活動」にこれまで全く縁がなく、明治学院大学に入学して初めてボランティア活動を行った。1・2年生時はボランティアセンター主催 1Day for Others プログラムやボランティアセンターの海外プログラム事業部（現ユートピア）で主に活動した。これらの実践活動と合わせて、大学での授業の学びによりボランティア活動の根幹を築いた。例えば、ボランティア学入門では大学生が行うボランティアの意義やボランティアがいかんして発展してきたか自分なりに考え、ディスカッションを通して他学生の意見を聞くことができた。

他にも心理学科の授業では対人援助における発達促進的な方法論を学んだ。このように実践と授業での学びを通じ、現在起こっている数多くの社会問題を知り関心を持つようになった。さらに継続的な直接支援が人との関係を重視する支援では特に必要と感じ、課題意識が芽生えた。このようなプロセスを通じ自分には何ができるのか、誰に対しどのような支援をしたいか模索するようになった。

2 ボランティア実践と授業の結びつき

日本語学習支援の実践と大学の授業につながりを感じている。第一に、心理学科専門科目の「異文化間心理学」では文化の異なる人の間でどのような葛藤が起こるか、メジャーの立場とマイナー立場のこころの在り方について学び、支援に生かすことができた。それぞれの文化を理解し尊重し合うことの重要性を学んだ。さらに明治学院共通科目である「多文化共生各論」では日本に住む外国人が抱える困難さや彼らとの会話の方法論を学んだ。その中でも「やさしい日本語」を使った会話や、言葉がうまく通じない中でどのようにコミュニケーションを図ろうか悩んだときにヒントを与えてくれる授業であった。このような大学での学びは日本語学習支援を始めるきっかけとなり、活動中の手ごたえを発見することができた。

これらの授業や実践経験を通して、外国にルーツをもつ子どもたちが抱える困難は大きく2つあると考える。1つ目はダブルリミテッドの問題（日本語力不足と母語の未発達により両言語ともきちんと習得できず年齢相応のレベルに達していない状態）に陥る可能性である。そこから学校の授業についていくことが困難となり、学習意欲の低下や自信低下のような不適応につながるとされる。さらに進学や就職の難しさも加わり、将来に大きな不安を抱える。

2つ目は喪失体験による困難である。移住は母国、母語、友だち、住まいを失い、幼い子どもに心に傷を残す可能性がある。先生や友だちとの交流に影響を及ぼし適応の難しさがあるのではないだろうか。このことが不登校やいじめの要因の一つとなることを危惧し、まずは学習面とコミュニケーション面からサポートしたいと考えた。

3 日本語学習支援教室「えがお」の活動

2年生の秋ごろからボランティアセンターで情報収集、ネット検索などを繰り返し、自分にできる継続的で直接的な支援の場として「日本語学習支援教室えがお」に辿り着いた。ここでは日本語を母語とせず海外にルーツをもつ小中学生を対象に、1対1で発話や教科学習のサポートをしている。

一人ひとりの学年を考慮しニーズをきちんと聞いてから計画を立てて行う。学習サポート中は生徒とのコミュニケーションを大切にしながら活動するよう日頃から心がけている。さらに季節の行事にちなんだ遊び（正月遊び、豆まき、七夕など）を毎月行うことで日本の文化に触れ、実験・工作教室を開いて創作する楽しさを味わえるよう工夫している。



教室で年賀状について説明し作成

4 担当した生徒の事例

①小学2年生の男の子（A君）

彼は家族と中国語で話しており、日本語は単語だけのゆっくりとした繰り返しの会話ができるレベルだった。生活の大半を占める「学校」での適応を目指すため、古今東西やしりとりなどの言葉遊びを通し、学校内で使うあいさつや様々なものの名前を話した。私との会話の練習を通じて自信を得、人との関わり合いの楽しさや魅力を見出せるよう楽しいレッスンを心がけた。成果として元々声を発することが少なかったが、圧倒的に話す量が増えた。単に日本語の単語が増えただけでなく、継続的に長期的なサポートの中で安心感が生まれ会話が上達したと考える。またお母さんから「家で学校の出来事を楽しそうに話してくれる」とお話しいただき、学校でも友達や先生と交流できるようになったと分かる。私自身もお母さんからの言葉を聞き、ささやかな達成感と今後も続けていきたいというモチベーション獲得になった。

②中学1年生の男の子（B君）

母語は英語であり、日本語での日常会話に問題ないが学習意欲が低く、国語への苦手意識が強かった。彼には小さな目標設定をすることでスモールステップの支援を行った。具体的に冬休みを利用し小学校低学年の漢字や音読を一緒に行った。同じ学年の教材を続けて挫折経験を重ねるより、レベルを落としても一歩ずつクリアし達成感を味わえるよう計画した。これにより苦手分野に対する抵抗感が薄れたように感じる。単なる教える－教わる関係だけでは得られない互いに信頼ある関わりができたからこそ、本成果につながった。

5 今後の見通しと課題

現在コロナの影響で対面での支援が難しく、オンライン・レッスンのみの活動をしている。会話や絵本の読み聞かせのレッスンは行えるが、教科学習支援は活動できていない。今後は対面とオンライン・レッスンを組み合わせながら活動できるよう体制を整えている。また子どもだけでなく親世代の支援も拡大したい。現在は日本語支援団体への研修やフォーラムに参加し、団体としてスキルアップしている。さらにこれまでの活動で人と人との関りにはコミュニケーションが重要だと実感した。特に相手を尊重した対話や傾聴の姿勢は、人間関係を構築する安心や信頼につながる。このことを広める活動として2020年秋に「1 Day for Others」プログラムで対話や傾聴を自分と対峙して考える企画を開催した。今後もえがおでの日本語学習支援を継続しながら、支援の拡充と対話や傾聴、本活動の拡大をめざす。



オンラインで絵本の読み聞かせ

【研究部門賞】

戸塚区生活センターでの傾聴ボランティア
～ひとりの人として関わる障がい者支援～

心理学部心理学科 3 年 矢嶋祥伍

1 きっかけとなったボランティア活動

一年の秋学期に行なわれたインテグレーション講座で先輩方の発表を聞いたことで、私が本当にやりたいボランティアを考えるようになり、精神疾患の方へのボランティア活動をやりたいと行き着いた。これは、大学生だからこそできる支援の形を探してみたいという思いから決めたものだった。



それから戸塚区生活支援センターのフリースペースでの傾聴ボランティアを行なうこととなり、現在まで約2年間活動を行なっている。そこでは、利用者さんとただお話しをしたり、プログラムのお手伝いで交流をしている。利用者さんは普段、支援者や家族などのごく限られた人との交流しか取れていないという現状がある。そのため、私のような一人の大学生と関わる事が利用者さんにとっては新鮮であり、社会との関わりを取り戻していくための一つの練習となるような取り組みとして存在しているのではないかと考える。

2 ボランティア実践と学びをどうつなげよう深めたか

主に行なっていた活動としては、①フリースペースでのお話し相手（時として相談相手）、②プログラムの補助があげられる。

①につながった学びとしては、「心理学的支援法」が役に立った。私がボランティアをスタートしたのは二年の最初からであり、まだまだ心理学の学びも足りず、どのように関わっていいのかわからなさを感じながら活動をしていた。その際にこの授業で学んでいた傾聴の姿勢や倫理は、人と関わって行く上で基本的な考え方として大いに役に立った。また、この授業内で杉山先生が「障がいがあったとしても普通の人と違いはない」という旨の話しをされていて、そのことが頭に残っていたが、それが実践を通して感じた学びにもなった。

私は、このボランティアを行うまでは精神疾患のある方と関わった経験がなかった。そのような中で実際に関わってみると、言われなければ障がいがあるとは思えない人も多かった。その人の一部分に障がいがあったとしても、あくまでも一人の人であり、「その人はその人である」というのは学んでいただけでは実感できなかったことで、実践を通したからこそ強く感じた点であった。

②に役立った学びとしては、「グループアプローチ」の授業が挙げられる。現在私は月曜日のプログラムの担当をさせていただいているが、そのプログラムをデザインする際にこの授業で学んだ集団力動やファシリテーターの視点は非常に役立った。このプログラムだけでなく、センターでは自然発生的に集団が生まれ、その場を円滑に回す立場として私がいるという状況が

しばしば生まれた。そのような際もこの知識や技術を用いることで利用者さん同士の関わりを促進することができた。

これらの実践は大学の学びと密につながっていたし、大学の学びを飛び越えるものであったかもしれない。というのは、DSM-5（精神障害の診断・統計マニュアル）で見ていた病気も実際の方を通して見ると全然違うし、授業での事例のように単純な見立てで済まない方もたくさんいる。実際に現場に触れたことでたくさん葛藤があったが、自分の将来に影響する学びを得ることができたと思う。また、そのような方々に一人の人として私に関わることは無駄ではなかったと信じている。もちろん専門的な支援は何もできていない。しかし、ただ人と関わることがピアを生む可能性もあったと思う。このことはただ大学で学んでいただけでは気づけなかったものと考えられる。それだけこのボランティアには価値があったと私は信じている。

3 今後の方向

私が実践してきた内容は、私のこれからの働き方に直結するものである。元々は急性期の精神疾患の方を支援したいと思い心理学科に入学したが、ボランティアを通して福祉領域での支援を行なっていきたいというように想いが変わっていった。それは、退院してきても地域定着が上手くいかず入退院を繰り返している方や自分の生きたいように生きられない方をたくさん見てきたのが影響している。今はだいたい地域での支援も充実してきているが、未だ医療領域に重点が置かれているのは変わらないのではないかなと思う。私はそこに問題意識を感じるところがあった。もっと福祉の領域に心理が入って心理的な面もサポートしながら、利用者さん達が自己実現をしていくような社会を目指していきたいという思いが生まれた。これからはボランティアとしてではなく、心理専門職を目指していく。これまでボランティアとして見てきたからこそ感じられた問題に専門家として少しでも取り組んでいくことを目指していきたい。

4 わたしにとって明治学院大学の教育理念である「Do for Others」とは？

私にとっての Do for Others は特別なものとして存在していない。Do for Others は自分自身の生き方であり、当たり前なものとして段々と存在していったように感じている。Do for Others というと何か特別なことをしなくてはならないとか、自分を消耗させなくてはならないとか感じるところが最初はあったように感じる。しかし、必ずしも give するだけである必要はないと思う。

利他的に生きていくことは結果的に自利につながっていく。利己的に生きていたら、幸福は循環していかないが、自分が利他的に生きて行くことでもちろん自分にも感謝や学びなど返ってくるものがあるし、自分がギフトした人がまた別の人にギフトをするという循環を生んでいける可能性がある。そう考えた時に、Do for Others である利他的な生き方をするということは当たり前であるように感じられる。

全ての人に対して利他的な生き方を押しつけることはできないと考える。しかし、利己よりも利他であることの方が明らかに人生は豊かなものになると考えられる。そのため、Do for Others は何も特別なものではなく、生き方の一つであると私は考える。

【実践部門賞】

外国人と日本社会 ～外国人労働者と家探し～

経済学部経済学科 3 年 天野萌

1 きっかけとなったボランティア活動

大学1年生の10月から、NPO法人かながわ外国人すまいサポートセンター（以降、すまセンと略す）で、中国語通訳スタッフとして相談者の話を通訳し、相談を受け、活動している。すまセンは、1999年に外国籍県民会議で外国人の居住が問題とされ、改善するために2001年に設立された。主に住いに関して10言語で相談を受けているが、その他に生活相談、通訳同行、翻訳もしている。私は中国語担当であることと、すまセンが関内駅に位置していることもあり、中華街で働く中国人の相談をよく担当する。



2 外国人問題の背景

近年、こういった外国人労働者は増加し続けている。その背景には、日本の少子高齢化問題が隠れている。少子高齢化により、生産年齢人口はピーク時1995年の約8700万人から、2060年に約4800万人まで減少すると推測されている。日本は経済規模の縮小や労働力不足という深刻な状況に陥っていることがわかる。改善するために、政府は外国人労働者の受け入れを拡大し、入管法の改正を行った。しかし、外国人労働者をたくさん受け入れるのはいいものの、きちんとした受け入れ体制が準備されていなく、問題が生じる。

前に述べた通り、すまセンは主に外国人の住まい関係の相談・支援をしている。しかし、なぜ外国人の住まい探し等を手伝う必要があるのだろうか。言語での支援が必要ということはもちろんだが、他の理由として外国人お断り物件や不動産店があるということをご存知だろうか。名前の通り、外国人の入居をお断りしている物件、外国人の部屋探しを担当したくない不動産店のことである。部屋探しの権利は誰にでもあり、公正でなければならないが、このようなことが実際起きている。すまセンに来る外国人の相談者で、席に着いた途端、「ここは外国人でも住める部屋を紹介できるの？」と聞かれたことが何度かある。とても悲しいことではないだろうか。このことを外国人問題というが、外国人問題とは、外国人が受けられるべき権利を受けられなかったり、差別やいじめを受けたり、いわゆる外国人が社会的弱い立場であることが問題だ。外国人は怖い、文化・習慣が違う、意思疎通ができない、トラブルが発生しやすい等の理由で外国人入居を拒んでいる現状がある。実際にすまセンの活動中にあった事例を一つ挙げる。

3 ボランティア実践と大学での学びをつなげて考える

公営住宅に当選した相談者の代わりに、団地の連絡員に連絡し引越しの挨拶をしようとしたところ問題が発生した。電話越しに、団地の連絡員が「外国人はゴミ捨てのルールを守らないから、引っ越してこないでほしい。行政は公営住宅に外国人を入れるだけ入れて、その後のことは何もしないか

ら。団地に負担がかかる。意思疎通もできないし、入居はやめてほしい」ときっぱり言われた。このケースから、問題は2点あると考えた。

1点目は行政が民間組織に頼りすぎて、民間組織に重度の負担があることだ。前でも述べた通り、急速な外国人労働者の受け入れを実施しているが、外国人労働者を守る法令や条例がない、受け入れ時の体勢が準備できていないことが問題点である。受け入れるだけ受け入れて、実際に外国人労働者が居住している地域の自治会等の一般的な民間組織では予想できないこと、対応できないことが起きた場合の対処法がないから負担が段々と大きくなる。行政がもっと民間組織に歩み寄り、連携をより深くするべきだと考える。外国人の居住が多い地域では行政が対応に慣れてきているが、それでも民間組織の協力は必要である。民間組織と行政の間に情報の交換や研修をしていくべきだと考える。

2点目は、連絡員がステレオタイプで外国人を判断していることだ。負担が大きいことは理解できるが、実際に会ったこともない、話したこともない人をルールを守らない人と判断を下しているのがわかる。人は知らず知らずのうちに、先入観や固定概念で人を評価してしまう。誰でも人に偏見を持つてはならないと思うが、当たり前のことを当たり前に実行することは、外的要因で非常に困難である。そこで、2点目の問題を、大学で学んだ経済学の観点から、外国人お断りをしている大家と外国人に置き換えて考えたい。

経済学的に分析すると、大家と外国人との間に「情報の不完全性・非対称性」が起きている。一部の大家がステレオタイプにより、外国人は皆ルールを守らないと判断した場合、それは大家の主観にすぎない。客観的なデータや情報を知らないことから、情報の不完全性が起きている。その他に、大家は媒体等を通して、外国人の中でルールを守らない人がいるという情報を得て、家を貸す際のリスクを最小化したいが、入居希望者が問題のある人かどうか知ることができないから、外国人の入居を断る。そこで、ルールを守っている大部分の外国人まで巻き込まれ、入居できず、お断りをされている。これらが大家と外国人との間における「情報の不完全性・非対称性」と考えるが、両方とも大家の利益をもとに行動していることがわかる。外国人に対してステレオタイプで判断しない、偏見を持たないこと自体が難しいが、利益が生じる話だとより一層解決策を生み出すのが困難となる。

4 今後の方向

すまセンの活動を通して、外国人を身近な存在にすることが、偏見を少なくする方法だと感じた。すまセンでは毎回色々なジャンルの相談を聞くので、外国人が困っている現状を知ることができる。しかし、世の中には知らない方ももちろんいるし、知っていても他人事で何も動き出そうとしない人もいる。個人の考えではあるが、これからは日本人がもっと当事者になる必要があると考える。当事者になってから気づくこと、分かることはたくさんある。また、当事者になることで、自分から動こうとする可能性が高くなる。外国人が一人でも、同じ学校、職場にいる、友達になることで、何かが自分の中で変わるきっかけになると私は考える。そこで、インクルーシブ教育を積極的に取り入れるべきだと考える。偏見が生まれる前に、価値観が固定化する前に、小さい頃から外国人を身近な存在にして欲しい。

2 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム

「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」は、本学で活発に行われているボランティア実践と、大学の学びを融合する全学的な取り組みとして 2016 年度に始まった。

このプログラムは、①135 時間以上のボランティア実践、②各学部学科と、共通科目を担当する教養教育センターが指定した科目のうち 16 単位の修得、③135 時間のボランティア実践と、大学での学びを結びつけるための手がかりをつくる「インテグレーション講座（4 回）」を受講した学生に、サティフィケート（修了証）を授与するものである。

2018 年度末には 2016 年度に登録した 12 名の学生（3 年生）が認証を受けた。初めての授与式は記念館において学長より学生一人一人に修了証が手渡された。それに続いて、2019 年度末には、2017 年に登録した 9 名の学生（3 年生）と 2016 年に登録した 2 名の学生（4 年生）の合計 11 名が認証を受けた。ただしコロナの流行が徐々に始まった時期であり、授与式は行わず郵送により認証状を渡した。

2020 年度は、コロナ禍により前年度までとは様々な面で違った体制でこのプログラムを進めてきた。まず、例年は春学期に行う第 1 回インテグレーション講座とプログラムへの登録を秋学期に延期し、オンラインで実施した。さらに、例年 11 月の土曜日に白金校舎で行う第 2・3・4 回インテグレーション講座も 11 月 7 日（土）にオンラインで行った。前年度までは午前中は「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」をおこなっていたが、今年度から「ボランティア大賞」と名称も改めて広く参加者を募った。午後の学部別分科会は学部ごとにオンラインのグループを設定して学部運営委員が進めた。

また、11 月のボランティアセンター運営委員会においてコロナの状況に応じた認証についても検討された。その結果「コロナ禍により活動時間が確保できなかったことを考慮して、135 時間に満たなくても 67 時間以上のボランティア活動の実績があれば最終報告書を受け付ける。その場合は別紙で申告書を添付して現場でのボランティア活動に代わりどういった取り組みをしたかを申告すること」というように、今年度に限っての要件の緩和が決められた。135 時間は 3 年間で「ボランティア活動 100 時間＋ミーティング 35 時間」として考えた時間数であることから、3 年間のうちの 1 年間でコロナ禍により活動が制限されたと考え、100 時間のうち 3 分の 1 を緩和するという考え方により 67 時間以上とした。

認証に向けて、最終報告書は 2021 年 1 月 12 日が提出〆切であった。最終報告書が出揃ってから、2 月 12 日の学部運営委員による提出までの 1 ヶ月間に、それぞれの学部運営委員により学部の登録学生に対して指導がなされた。前年度までは対面での指導が中心であったが、今年度はメールやオンラインでのやりとりで指導がなされた。対面での指導が難しい中で、最終報告書の提出のあったどの学部でも、学部の専門性を深める熱心な指導がなされていることに心より感謝し、このプログラムが全学プログラムであることを改めて実感している。

2020 年度スケジュール

日にち・会場	内容
4 月	大学から新入生に郵送される配付物にて「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」についてチラシで告知
7 月	「サティフィケイトプログラムだより」2020 年 7 月号発行
① 9 月 29 日 (火) ② 9 月 30 日 (水) ③ 10 月 1 日 (木) ④ 10 月 2 日 (金) ⑤ 10 月 5 日 (月)	ガイダンスの実施 (ボランティアと教育の連携についての意義、プログラムの概要を説明)
9 月 29 日 (火)	インテグレーション講座の告知・エントリー受付開始
① 10 月 13 日 (火) 5 時限 ② 10 月 21 日 (水) 3 時限 ③ 10 月 29 日 (木) 5 時限 ④ 10 月 31 日 (土) 2 時限 全てオンライン	第一回インテグレーション講座 対象：登録 1・2 年生 【内容】 講義「ボランティアするとはどういうことか」猪瀬浩平 (教養教育センター教授、ボランティアセンター長補佐) ワークショップ「自分の関心と社会課題とを結びつける」 【講師】 猪瀬浩平 (教養教育センター教授) 菅沼彰宏 (ボランティアコーディネーター) 磯野昌子 (ボランティアコーディネーター) 田口めぐみ (ボランティアコーディネーター)
11 月 7 日 (土) オンライン 進行運営：白金校舎ボランティアセンター 審査員の一部：白金校舎 10 号館法廷教室	第二回～第四回インテグレーション講座 対象：全登録生 【テーマ】 登録 1 年生「体験を言語化するために」 登録 2 年生「自分のボランティア実践を大学での学びに結びつける」 登録 3 年生「ボランティア実践と大学での学びを融合した“私の Do for Others”」 【内容】 午前の部：「ボランティア大賞」の聴講 午後の部：登録 1 年生は、ボランティア大賞の感想と各自のこれまでのボランティア体験を共有した。また、「体験を言語化するために」必要な視点を、教養教育センターの猪瀬教授と長谷部准教授の対談を聞きながら考え、学んだことをワークシートに記入して提出した。

	登録2年生、登録3年生は、学部ごとに分かれ、3年生は自らの「ボランティア実践と大学での学び」の成果をプレゼンテーションした。登録2年生は聴講のうえ、レポートを提出。後半は2年生がそれぞれの学びと実践の現状を報告し、3年生が自身の経験に基づきアドバイスした。 【講師】 午前の部：ボランティアセンター運営委員 午後の部（1年生対象）：教養教育センターのボランティアセンター運営委員（猪瀬浩平教授、長谷部美佳准教授） 午後の部（2・3年生対象）：各学部のボランティアセンター運営委員
3月16日（火）	修了証授与式（記念館1階小チャペル：認定対象者10名、うち欠席者2名は後日別途授与）
3月末	「サティフィケートプログラムだより」2021年3・4月号発行

2020年度プログラム登録者数

	学部						合計
	文	経済	社会	法	国際	心理	
2018年度登録生 （第4回インテグレーション講座を受講した者）	2	4	1	0	2	5	14
2019年度登録生 （第3回インテグレーション講座を受講した者）	1	0	6	4	1	2	14
2020年度生 （第2回インテグレーション講座を受講した者） （ ）は第1回インテグレーション講座を受講した人数	5 (7)	7 (7)	7 (8)	3 (3)	4 (4)	1 (1)	27 (30)
合計	8	11	14	7	7	8	55

取り組みの様子

登録2年目となる2019年度生登録は、11月の第3回インテグレーション講座のレポートを提出し、2年目を終えた登録生は14名である。

登録1年目の2020年度登録学生は、第1回インテグレーション講座を受講して登録した人数は30名であった。11月の第2回インテグレーション講座で教養教育センターの運営委員によるボランティア学のレクチャーを受けレポートを提出し、1年目を終えた登録生は27名である。この学年からは、報告の提出方法も変更をした。全学的に学生の授業管理を「マナバ」というソフトを活用して行うことになり、日常のボランティア活動の報告書も今年度登録生からは「マナバ」を通して提出やフィードバックを行うようにした。さらに、活動した都度提出していた活動報告書を月ごとに提出することとした。

登録学生の実態を見ながらプログラムの取り組み方法を改善したり、コロナ禍でも継続できるように変更したりしながら、サティフィケートプログラムを開始して5年目を終えた。プログラム開始6年目を迎える2021年度も、続けてコロナの影響は避けられないと考えられ、対面でのボランティア活動には制約が続くことになりそうである。活動時間が少なくなったりオンラインでの活動であったりしても、活動と大学での学びをしっかりとつないで考えることを大切にしていくことが、このプログラムにとっても磨きがかかり、意味を深める歩みになるように進めていきたい。

(ボランティアコーディネーター 田口めぐみ)



2020年度 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム 修了証授与式

ノートテイクと経済学からみる ボランティアのサボりへの対処法

経済学部経済学科3年 清水琴詠

1 このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学びについて

私は、聴覚障害のある学生の講義サポートであるパソコンノートテイクに力を入れてきた。この活動は、二人のノートテイク（ノートテイクする側）が先生の話を変互にタイピングする。入力した文章が聴覚障害学生のパソコンに表示され、聴覚に障害があっても講義内容や教室の雰囲気をリアルタイムで把握できるのが特徴だ。

私はこれまで、ノートテイク以外のボランティアにも参加してきた。そこでは当日になると来ない学生や、やる気が感じられない学生も見受けられた。しかし、ノートテイクではそういった学生を見かけない。そこで、なぜノートテイクをサボる人がいないのか分析してみようと思いついたのが始まりである。

2 ボランティア実践と学びをどうつなげよう深めたか

●学び1：「ミクロ経済学入門」（1年春学期に履修）

- ・講義内容：需要と供給の関係や、完全競争と独占など、市場メカニズムの基礎を学習する。
- ・この科目から考えたノートテイクにサボる人がいない理由1つ目：有償ボランティアだから私たちがノートテイクは、大学から謝礼金をいただいている。ここで考えたいのは、「機会費用」という概念である。機会費用とは、「何かを手に入れるために放棄したものの価値」。ボランティアを有償化することで機会費用が減り、結果として長期的なボランティアへの参加意欲を喚起できていると私は考える。専門性が高いものなど、有償にすべきボランティアもあるのではないだろうか。

●学び2：「企業と組織の経済学」（3年春学期に履修）

- ・講義内容：企業の内部組織を考察して、効率的な組織について学ぶ。
- ・この科目から考えたノートテイクにサボる人がいない理由2つ目：少人数の活動だから「グラミン銀行」なるものがある。バングラデシュの貧困削減に貢献した銀行である。その仕組みとは、5人組のグループのうち、誰か1人でも返済できなければ、他の4人は今後一切お金を借りられなくなるといったものだ。結果、5人組はお互いを観察するようになった。誰かが危険な投資をすると自分にも被害が及ぶためである。これは互いを観察できる少人数グループだからこそ成り立っている制度で、ノートテイクにも「少人数であるからこそ怠けられない」力が働いているのではないかと私は思う。

3 今後の方向

有償ボランティアと労働者の線引きはどこにあるのかが気になっている。アルバイトに払う賃金が最低賃金以下だと違法になるが、ボランティアの場合は違法にならない。しかし、時間

を指定されて働いている以上、有償ボランティアと労働者はどこで何が違うのか？という疑問が浮かんでくる。経済学と労働は切っても切り離せない間柄であるから、私が学んできたことと結び付けて考えていきたいと思う。

4 あなたにとって明治学院大学の教育理念である「Do for Others」とは何であったといえますか？

「Do for Others」でもあり、「Do for Myself」でもあった。ボランティアは「やってあげる」という押しつけがましいものではない。自分のためにも相手のためにもなる、言わば「一石二鳥」な活動であると思う。聖書には「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（マタイ 7-12）とあるが、この黄金律は大学を卒業しても念頭に置いておきたい言葉である。

経営学の学びと食糧問題

経済学部経営学科3年 大塚麻奈

1 このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学びについて

所属する海外プログラム事業部の TABLE FOR TWO 企画に携わったことで食糧問題に興味をもち、食糧問題に興味のある学生や社会人が集まる交流会への参加や品川区の商店街で行われた「中高生と商店街による食品ロス削減ワークショップ」に学生ファシリテーターとして関わり、世界の飢餓問題や日本の食品ロス問題についての学びを深めた。

2 ボランティア実践と学びをどうつなげどう深めたか

私が3年間で取り組んだボランティア活動の中で、特に経営学の学びと結び付けて取り組んだ活動は「食品ロス削減ワークショップ」である。品川区の学校に通う中高生向けに、商店街の食品ロス削減のアイデアを考えるワークショップを2日間で行った。私は、中高生のワークのサポートをする学生ファシリテーターとして参加し「中高生の食糧問題への関心を高め、商店街の食品ロスを削減するアイデアを出してもらう」ことを目標に、経営学で学んだ知識や事前に得た食糧問題の知識を活かしワークを進めた。

具体的には、組織論1で学んだ「リーダーシップ理論」と「モチベーション理論」を活用し、「自分でできた」という達成感を持ってもらえるようにサポートすることで、ワークショップを通じて中高生に食品ロス削減を自分の意志で取り組んでもらえるように意識した。実際に1日目のワーク終了後、家庭での食品ロスを削減するために何ができるのかを考えてもらった結果、その後、買い物をするときは自分が食べられる量だけ買うようにしたり、冷蔵庫の中を見て、賞味期限の切れそうなものを前に出すようにしてみたなど、自発的に食品ロス削減のアイデアを考えて行動したという意見を聞くことができた。また、あまり意見が出せない子にも主体的にワークに取り組んでもらうために、経営学原理2で学んだ「社会的交換理論」を用いて対応策を考えた。ワークに対して、私自身が積極的に取り組む姿を見てもらうことで、グループ全員が自然と意見を出し合うことができたと考えている。

経営学の視点から中高生のファシリテートを考えたことで、経営学は会社の運営だけでなく、社会の様々な問題を解決するためにも必要な学問と考えるようになった。また、中高生の中で「将来を担う自分たちの世代が行動を起こしていきたい」という意見があり、私自身も社会の多くの問題に目をむけ、当事者意識を持って取り組んでいく必要があると感じた。ボランティアを通じて、経営学の学びを振り返ったことで、今自分が経営学を学ぶことの大切さや価値を考えるようになり、今後学びと実践を繰り返すことで身に付けていきたいと思う。

3 今後の方向

今後、経営学で学んだマネジメントの基礎や組織運営に関わる様々な知識を活かし、経営学の視点から考え、食糧問題に関わらず社会の課題を解決するために行動していきたい。

4 あなたにとって明治学院大学の教育理念である「Do for Others」とは何であったといえますか？

私にとって「Do for Others」とは、他者への貢献を通じて、自身が成長することのできるものであったといえる。今の自分にできることを考え、様々な活動を行う中で、多くの人と出会い、たくさんの経験をさせていただいた。それによってもっと多くのものを知りたいという気持ちにもなり、これまでの活動を振り返ると Do for Others という理念をもとに自身の成長があったと思う。

音楽の贈与と犯罪抑止としてのオーケストラ

社会学部社会学科3年 亀田百花

1 このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学びについて

NPO 法人ワールドシップの海外演奏プロジェクトに打楽器奏者として参加し、芸術教育の機会に恵まれない東南アジア諸国でオーケストラの演奏に触れる機会を提供する活動に加え、現地の音楽コミュニティとの継続的なかわりを持ち、技術面の支援をしている。この経験を、社会学者ロバート・K.マーソンの著書『社会理論と社会構造』における理論に還元し、犯罪抑止と音楽教育の関係性を考察した。

2 ボランティア実践と学びをどうつなげよう深めたか

自身の所属するオーケストラは、フィリピン・マニラの中心部に位置する「トンド地区」というアジア最大のスラム街に位置する「トンド・チェンバーオーケストラ」という子ども向けの無料の音楽教室の支援をしている。この地域の子どもたちは危険なごみ山の中からお金になりそうなものを探し、生計を支えている。また、この地域では、薬物やスリ、強盗等の犯罪が頻発している。そこで、社会学者 R.K.マーソンの『社会理論と社会構造』にて述べられている「文化的目標と制度的手段」という理論を基に、「音楽教室は犯罪抑止となるのか」という問いを考察した。

マーソンは、文化的に規定された目標や関心からなり、社会の全成員に対して正当な目標として掲げられている「文化的目標」には、一般に承認され、社会に許容されている「制度的規範」に基づいた手段が目標と結びついていると述べている。その一方で、制度的規範から外れた手段（逸脱）は、社会に許容されていなくても、望ましい価値を獲得するのに最も効果的と思われる手続きであると述べている。トンド地区の場合、文化的目標を「生活費を稼ぐ」、そしてその手段として社会に許容されている制度的手段が「ゴミ山で売れそうなものを探す」という構造である。加えて、マーソンはさまざまな社会階級における逸脱行為の比率に関し、「金儲け」のために合法的な道をとることが制限されているのは、階級構造がどの平面でも有能な人々に十分な価値を与えていないためである」と述べている。この記述から、貧困地域においては、「生活するためのお金を得る」という目標達成のための手段は「ゴミ山からごみを集めて売る」という手段に限定され、その環境から脱却するために、彼らに残されるのは、「逸脱」のみであると考えられる。

では、このような社会構造のスラム街の音楽教室は何をもたらすのか。第一に、元々の「生活費を稼ぐ」という目標のための制度的規範の手段「ゴミをあさる」という選択肢に加え、「音楽教室に通い、音楽を学ぶ」という手段が与えられる。また、音楽教室によって慣習的、合法的な成功の手段を得る機会が生まれ、現存の限られた制度的規範の手段に選択肢が増えた

ことや、オーケストラの組織やアンサンブルの演奏を通じて得た規律・調和・自己肯定感によって、制度的手段から外れた逸脱、つまり犯罪へと道をそれることを防げるのではないかと考察した。

3 今後の方向

3年間のボランティア活動を通し得た経験や知見を、今回のテーマに限らず、文化資本と共同体の関係性等、他のテーマとの結びつきも考え、学問に還元したい。また、社会を俯瞰的に「観察する」社会学の視点と、自身の働きが観察対象の社会に影響を与えてしまうことへの矛盾等、ボランティア活動の在り方とも向き合いたい。

人々がマイノリティであると感じない社会へ

国際学部国際学科3年 椎名里帆

1 このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学びについて

私は、主に2つのボランティア実践を学科の学びに繋げることができました。

1つ目は「WFP ウォーク・ザ・ワールド」に参加したことをきっかけに、国際学科の授業で「社会開発論」を履修したことです。イベントで知ったアフリカの現状や日本の取り組みをより深く知りたいと思ったからです。ボランティア活動では、世界の人々の飢餓ゼロ、教育の機会の拡大、ジェンダー平等の推進、貧困撲滅への貢献として国連 WFP が様々な取り組みを行っていることを知りました。私はそのイベントスタッフとしてアフリカの子どもたちへの学校給食支援のために参加者の方々に赤いマグカップを売りました。500 円のマグカップを購入することで8人分の給食を届けることができるということを自ら看板を持って参加者に声をかけにいき、多くの人に購入してもらいました。この経験から自分の行動で支援の輪を広げられることを実感しました。「社会開発論」の授業では途上国の紛争や飢餓問題の現状にとどまらず、日本の NGO の歴史から学びました。また彼らの生活改善としてプライマリヘルスケアという概念を学び、発育観察、経口補水塩療法などの7種類の方法を勉強しました。「WFP ウォーク・ザ・ワールド」に参加したことで、アフリカの飢餓問題に興味を持ち、具体的な支援の方法を学科で学び、今後もそういった活動に貢献していきたいと思いました。

2つ目は「あーすフェスタ」に参加したことで日本に暮らす外国人が生活しやすくなるためにはどうしていくべきかについて考える機会を持ちました。私は、2 年次に「異文化コミュニケーション」、3 年次に「アメリカの文化と社会」を履修し、多文化共生社会についてアメリカ社会の視点から考えてきました。「あーすフェスタ」では中国や東南アジアといった様々な国籍を持った方々が食や踊りを通じて市民にお祭りを開くというものでした。こういったイベントに参加することで、子どもから大人まで幅広い方々の多様性に対する認識の仕方に大きく影響すると思いました。実際にアメリカの人種問題について学ぶ中で、偏見や差別のない多文化共生のためにはマイノリティを「特別視」するのではなく、一人一人のバックグラウンドを知って受け入れる姿勢が重要だということを感じました。こういった考えをもとにアメリカ研究のゼミで現在は卒業論文を進めています。

2 ボランティア実践と学びをどうつなげよう深めたか

私は数多くのボランティアの中で主にこの2つのボランティア経験が学科の学びに大いに繋がったと考えます。さらに私はボランティア活動を通して子ども、留学生、年上の方といった幅広い人とのコミュニケーションの取り方も学びました。このように私にとっての「Do for Others」は、「人々への貢献」に加え、「交流の場」や「学びの場」でもありました。社会問題に興味を持つことでボランティア意識が芽生え、自分自身で支援の輪を広げる行動に繋がったと実感しています。ボランティアは一方的な支援ではなく、お互いに助け合っていると感じ、今後もこういった人との出会いを大切に、社会に貢献していきたいです。

ボランティアが生み出す循環

国際学部国際学科3年 松山舞香

1 このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学びについて

私はボランティアサティフィケートプログラムを通して2つの「繋がり」を実感することができました。1 つめは「人と人との繋がり」です。ボランティア活動を通して、年齢、国籍に関わらず多くの人々とコミュニケーションを取る機会に恵まれ、大学の友人としか関わらない学生生活では築く事が出来ない人脈を築く事が出来ました。

2 つめは「ボランティア活動から新たな興味への繋がり」です。活動の現場でのコミュニケーションを通して自分の知らなかった知識や価値観に触れることで、新たな興味が生まれ、次学期にその内容を扱っている講義を履修し、座学の知識をボランティアの現場で実践するという循環を構築する事ができました。

2 ボランティア実践と学びをどうつなげどう深めたか

以上の事から、私のボランティア活動は「人との繋がりを深める中で、ボランティア活動と学問の循環を実感できるものであった」と考えます。活動は、主に大学側から提供されるプログラムの中から「知識を得たい」「理解を深めたい」と感じたものをメインに参加しました。

例えば、1 年次に履修した多文化共生入門で取り扱った「海外にルーツをもつ人々の暮らし」に関連づけ、「横浜中華街で春節を飾ろう」(1Day for Others) です。このプログラムでは、山手中華学校に訪問させていただき、同校の生徒達と中華街にある展示スペースの飾り付けを行ったのですが、飾り付けを行う前に講義形式で同校の歴史や各種学校としての学校経営のシステムを学びました。講義を通して、社会がグローバル化し日本も多民族国家となっている一方で、同校やインターナショナルスクールなどの各種学校には政府・地方自治体からの支援金がなく、教科書も無料ではないという課題を知ることが出来ました。

一方で、大学の授業で学んだ「海外にルーツを持つ人々が日本で暮らしていく上で抱える困難」や上記のような現状にばかり着目してしまう事によって「かわいそう」や「支援してあげなければいけない存在」といったステレオタイプ化されたイメージを持っていたことにも気づかされました。この経験を通して、他者と関わる際に重要なことは、先入観に基づいた画一的なイメージを持ったまま関わるのではなく、「その人“個人”はどんな人なのか」を見ることがだにより意識するようになりました。

このことは『グローバル社会と市民活動』で学んだ“一般性と個別性”に通ずると考えます。“一般性と個別性”とは、外から見たら同じ課題に見えても当事者からすると全く異なるものの場合があり、背景を集団全体の意見としてではなく、1 つ1 つを個別の意見としてヒヤリングし、解決策も画一的な物ではなく多角的な視野から考えなければいけないということです。

これを実感したのは『SDGs をテーマに小学生と遊ぼう』でサポート学生として企画立案を行った時です。受け入れ先の興望館からの要望は、①児童が楽しめること、②学びを取り入

れられることでした。そこで自分達が学んでいる SDG s についてのクイズ大会を企画しました。しかし、自分達のイメージする小学生の理解力をベースに考えてしまったため、イベント終了後に「クイズの内容や説明が子どもには難しかった。」という反省ができました。

以前までは「より多くの人に当てはまることを重視した方が効果的である」と考えていましたが、「個々に寄り添うことの積み重ねによって効果を得ることが出来る」ということを実感することが出来ました。

3 今後の方向

今後は、相手から話してくれたことを理解するだけでなく、最初は言うつもりが無かった内容も自然と言って貰えるように会話の展開を工夫し、話しやすい雰囲気作りを意識し、相手の本音や潜在的ニーズを引き出す傾聴力を養いたいと考えています。

障害のある方とのコミュニケーション

心理学部心理学科3年 伊藤遥音

1 このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学びについて

このテーマのきっかけとなったボランティア活動は、聴覚障害のある学生を対象に授業サポートをするノートテイクや、知的障害・発達障害のある子どもたちのためのデイサービスなどが挙げられる。このテーマに興味をもつきっかけとなった学びとしては、障害のある方の特徴や困難などを学ぶ、障害者・障害児心理学などが挙げられる。

2 ボランティア実践と学びをどうつなげどう深めたか

まずノートテイクでは、聴覚に障害のある方でも1人ひとり聞こえる程度は異なり、テイクをするうえでも重視するポイントが変わってくる。したがって、それを把握するためにもコミュニケーションが必要になる。そこで私がテイクをする時に心がけていたことは、相手の目を見て、口を大きく動かしながら話すことや筆談などなるべく誤解のないようなコミュニケーションをとることである。また授業中のハプニングなどでは簡単な手話を用いることも行った。

このような経験をしていくなかで、障害者・障害児心理学を受講した。この授業では、聴覚障害は見た目で判断することが難しく、相手の声が聞こえにくい、あるいは聞こえないため、コミュニケーションがとりづらいと学んだ。このことをボランティアでの経験と結びつけることで、よりコミュニケーションの重要性を感じ、普段行っている言葉でのコミュニケーション以外にも、様々な工夫をしたコミュニケーションをしていきたいと改めて考えることができた。

一方デイサービスは、小学校低学年のAちゃんとの関わりを挙げる。Aちゃんが実際にはどのような障害があるのかは職員の方から確認することができなかったが、いくつかの特徴からダウン症と考えられた。その日は、Aちゃんはお勉強の時間にやっていたひらがなの練習が気に入ったようで、お勉強の時間が終わりレクリエーションの時間になっても、参加せずずっとひらがなの練習を続けていた。障害者・障害児心理学では、ダウン症についても学び、ダウン症の方は頑固な場合があると学んでいた。また、話を理解しやすいように、具体的に説明する必要があることも学んだ。

そこで、Aちゃんと一緒にお勉強をしながら、他の子がやっているレクリエーションに興味をもってもらえるように話かけることを心がけた。例えば、「みんな〇〇しているよ。私はAちゃんがやっているところも見てみたいな。絶対楽しいよ」というように、興味を持ってもらえるようにしながら、具体的にはみんなは何をしているのかなどを説明するように心がけて接するようにしていた。その結果、Aちゃんもレクリエーションに参加してくれて、楽しそうにみんなと活動することができていた。このように、障害の特徴を知ること、それを加味しながら、よりその子に合った方法でコミュニケーションをとることができたと思う。

3 今後の方向

まず、コミュニケーションの取り方をより工夫していきたい。例えば、デイサービスのお子さんには言葉が話せない子もいる。そこで授業で学んだ、支援する際の姿勢やノンバーバルなコミュニケーションを活かし、より良いコミュニケーションが取れるようにしていきたい。また、自分が行ってきたボランティアを通じて関わらせていただいた分野を、より多くの人に知ってもらえるような活動をしていきたい。

4 あなたにとって明治学院大学の教育理念である「Do for Others」とは何であったといえますか？

私にとっての他者への貢献は、相手も自分も双方にとって得られるものがあると感じる。ボランティアをすることで、その社会のなかに大学生ボランティアという新たな立場の人が入り、普段とは違った刺激を受けると考えられる。一方自分自身も今まで知らなかった世界を知ったり、実際に体験して新たな考えや感情などの刺激を受けたりと、双方に得られるものがあるのではないかと思い、私にとっての「Do for Others」とは、「みんなのためであり、私自身のためでもある」ことだと考える。

障害のある子への地域支援

心理学部心理学科3年 笠本楓夏

1 このテーマのきっかけとなった体験・ボランティア活動・学びについて

このテーマのきっかけとなった体験は、ノートテイク活動と地域の障害のある子への支援施設でのボランティア活動である。ノートテイクでは聴覚障害のある学生の授業補助を行う。障害のある方に対し「自分でも力になれることがある」という気づきから、地域支援の現場でのボランティア活動につながった。

2 ボランティア実践と学びをどうつなげよう深めたか

主に活動した場は、港区にある障害者放課後等デイサービス施設である。発達障害や知的障害のある小学校1年生から高校3年生までの子どもたちが通っている。私は、指導員ボランティアとして、遊び、療育としての体操やミニゲーム、勉強や食事の補助を行った。

私はこの活動を通じて、地域支援の実際と個人差の大きさや接し方について学んだ。まず、地域支援の実際についての学びは、保護者の方の支援の活用の仕方に工夫がみられたことである。例えば、きょうだい2人で通っている子たちが、同日に2人来ることもあれば、1人ずつ来ることもあり、家族の時間と個々の時間を確保するという面で、うまく支援を利用していることがわかる。障害のある子どもを持つ親は、周囲からの目もあり、ストレスを感じやすいと考えられる。親がこころの健康を保つことで、親子双方にとって良い結果を生む。そのための場としての、地域支援の重要性について改めて考えさせられた。

次に、私は子どもたちと実際に関わる中で、個人差の大きさや接し方について学んだ。これまで、学科においても発達段階や発達障害・知的障害について学んできた。ある程度の知識はあっても、実際にはどのような方たちなのかはわからなかった。活動を通じ、同じ障害として一括りにすべきではないことを実感した。そして、それぞれの行動に対しても、見たままを受け取るのではなく、「なぜ」を考えることの大切さを知った。

ボランティア実践を通して、大学での学びを知識としてだけでなく、経験としてより深いものにできたことで、自分自身の視野や考え方が広がった。私が、この活動を通して最も大事にしたいと思ったことは、個人を尊重することである。それぞれの人が異なることは当たり前で、それを否定するべきではなく、足りていない部分に対しては、その成長を促すような関わりをすべきであるとする。継続的に関わらせていただく中で、それぞれの子が、今までできなかったことができるようになったという場面を何度か見た。「障害がある」と聞くと、できないことや、ほかの人との異なる特徴に焦点が当てられがちであるが、個人を尊重し、その特徴や違いを認めたうえで、できることに目を向けていくことも必要であるとする。

3 今後の方向

ボランティア活動を通じ、差別や偏見について興味を持った。ゼミでも「障害のある方への偏見や差別」とテーマを設定し、先行研究を調べ、発表を行った。どのような関わりが偏見や差別を減らすことにつながるのか、心理学的に学んでいきたい。また、学生が障害のことを知識としても経験としても学べる場づくりもしていきたい。

4 あなたにとって明治学院大学の教育理念である「Do for Others」とは何であったといえますか？

私にとっての「Do for Others」は、「行動」と、「人との繋がり」であったといえる。私を行動に促してくれたのは、ボランティアセンターの方々や友人である。そして、行動したことにより、人との繋がりが広がり、私自身も、より多くの学びの機会を得ることが出来た。

3 教育ビジョン・ボランティア教育連絡会議「パヤオプロジェクト」

■パヤオプロジェクトとは

明治学院では 2011 年 3 月に発信された「明治学院一貫教育宣言」を具現化するために、2016 年度より「明治学院教育ビジョン」が実施されている。中高大の連携を推進するために発足した 5 つのプロジェクトチームの一つが「ボランティア教育連絡会議」である。

ボランティア教育連絡会議では、中高大それぞれが行ってきた活動の中から協働で取り組める活動を模索した。そこで中学で継続しているタイ北部の児童を保護・育成する YMCA パヤオセンターへの支援活動について調査したところ、大学でも一時期学生による当センターでの独自活動が確認された。こうした経緯から 2019 年に海外への訪問活動プログラム「パヤオプロジェクト」が発足した。活動は一過性のものとはせず、最低 5 年はプログラムとして継続すること、訪問後にはそれぞれの学校で活動報告会を開催し、現地で学んだことを広めることを申し合わせた。発足後の 2019 年 8 月に教職員 6 名が先遣隊として現地入りし情報収集を行った。

■2020 年度の活動

パヤオセンターへの訪問プログラムはスケジュール調整により 8 月下旬と定められ、パヤオプロジェクトに関心のある学生生徒を公募して 13 名が採用された。ゴールデンウィーク中に横浜キャンパスのブラウン館で顔合わせを兼ねた宿泊を伴う研修を皮切りに、事前研修、現地訪問、活動報告会実施という計画を立てていたが、コロナ禍により現地訪問の断念を余儀なくされ、2020 年度は以下のオンラインによる活動に留めた。

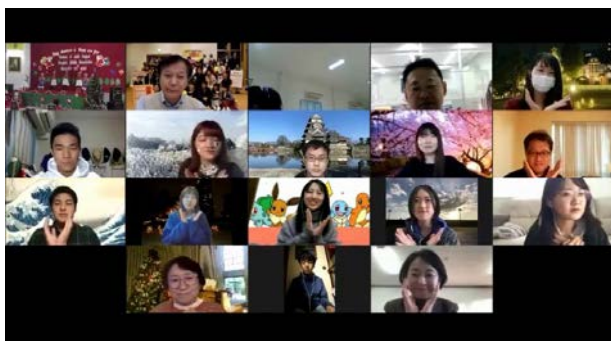
1) パヤオセンターとのオンライン交流(2020 年 12 月 26 日)

交流内容：動画によるパヤオセンター紹介とタイの現状報告、明治学院の生徒学生、パヤオセンターの子どもたち双方による質疑応答、タイの伝統芸能（踊り・歌）披露

2) タマサート大学生（元明治学院大留学生）とのオンライン交流(2021 年 2 月 10 日)

交流内容：留学生として感じた日本とタイの文化の違い、ミャンマーのクーデターによるタイ国内での影響など、双方の聞いてみたいことを質問した。わからない言葉は手元のパソコンで確認するなどオンラインならではの手法で交流を深めた。

コロナ禍は収束の見込みが立たず、現時点では 2021 年度のプログラムも延期が決定している。2020 年度の活動をもとに新規学生生徒によるアイデアによる新たな活動に期待したい。



（職員 波多野洋行）

パヤオの子どもたちから山岳民族の踊りを学んでいる様子

4 ボランティアファンド学生チャレンジ（通称：ボラチャレ）

「ボランティアファンド学生チャレンジ（以下、ボラチャレ）」とは、学生が自ら企画し、その活動を応援する奨励金制度である。2020 年度は 2 つの点でそれまでとは異なる一年となった。一つ目は、言うまでもなく新型コロナウイルスの感染拡大により、ボランティアの「現場」での活動が大きく制限され、各団体とも計画変更を余儀なくされたことである。もう一つは、今回限定ではあるが、期間を半年としたボラチャレを春募集したことである。

まずはコロナの影響についてである。2019 年度には 3 団体を採択したのであるが、活動の半ばで緊急事態宣言が発出した。大学も入学式の中止、以後オンライン授業になっていった過程は記憶にも新しい。そんな中、3 団体とも大きく計画変更をして取り組んだ。

「MGU Sea Turtle」は、環境教育に力を入れ、子どもでも参加できる環境にまつわるクイズや、環境に配慮した家庭内での取り組みなど、Instagram を活用して精力的に発信した。また、ファストファッションを考え、環境にやさしい服の認知を進める「MGCloset」は、エシカルファッションに焦点を当ててデータ版での雑誌編集なども行った。もちろん、同時に SNS を利用しての発信も精力的であった。また、「チーム郡上」も「おうちで郡上」として、オンライン上で踊りを披露するなど、考え得る、そしてでき得る最善の取り組みに挑戦していた。

半年間のボラチャレについてであるが、こちらは 2 団体が採用となった。うち 1 団体の 18psychology は 1 Day for Others と連携した企画へと発展し、相乗効果をもたらす結果となった。もう 1 団体は東日本大震災の復興支援を目的としていたが、そもそも時期的に現地に入ることもできず、残念ながら期間内での活動が困難な結果となってしまった。

このプログラムは、学生の自発的活動を応援するものではあるが、私たちも学生たちの活動を通じて、社会課題に出会い、そして一緒に学んでいくことにつながる「伴走」ができるようにしていきたいと思った。

（ボランティアコーディネーター 菅沼彰宏）

2019 年度助成企画

プロジェクト名	団体名	助成金額	使用金額
エシカルファッション雑誌作成	MGCloset	¥200,000	¥ 50,511
海洋保護プロジェクト～Substitutes for Plastics～	MGU Sea Turtle	¥168,000	¥ 330
郡上おどり in 戸塚学生プロジェクト	チーム MG 郡上	¥160,000	¥ 0
対話 Open Dialogue～学びと実践のボランティア～	18psychology	¥97,000	¥ 22,274
災害から多くの人々が救われる社会への架け橋	東日本@吉里吉里チーム		

※18psychology、東日本@吉里吉里チームは、半年間採用

◇エシカルファッション

プロジェクト名	エシカルファッション雑誌作成
団体名	MGCloset
企画の目的	エシカルファッションの認知度拡大

実施概要

服の大量生産・大量消費によって引き起こされる環境問題や過酷労働の実態の改善に貢献するため、MGCloset では「環境にやさしい服」の認知度向上に貢献してきた。具体的には、近年注目を集める「エシカルファッション」に焦点を当て、ファッション雑誌の作成を行なった。着手した時期は遅かったため、9 月に撮影会を行い、11 月にデータ版で雑誌を編集した。その他、コロナ禍の中でできる活動を模索し、YouTube、Instagram、Facebook といった SNS を利用したエシカルファッションの普及活動に注力してきた。YouTube は初めての試みではあったが、団体創設秘話や古着を活用したコーデ特集、オーガニックコットンの育成プロジェクトなどの企画で動画作成を行い、約 140 回の視聴回数を達成した。また Instagram 活動では定期的な投稿や学生が関心を持ちやすいテーマで発信を行い、フォロワー数が昨年度の倍以上となった。



ファッション雑誌の写真撮影



感想・活動を通して得た学び

MGCloset 二代目の代表を経験し、マネジメント力や団体運営のノウハウについて深く学び、自身の成長に繋がる 1 年間であった。昨年度はリユースした服でファッションショーを行うという内容で一年間活動してきたが、今年度はコロナ禍の影響もあり、MGCloset の信念である「若い世代の関心分野であるファッションという観点から、多くの人を巻き込んで何かを成し遂げる」ことが困難であった。

その中で、オンライン上での定期ミーティングを重ねて、今年度の中頃から振出しに戻ってエシカルファッション雑誌作成の準備を行ってきた。オンライン上での団体運営はとても困難なもので、メンバーのモチベーション維持や役割分担にとても苦戦した。実際、私自身は一人でなんでもこなせると思い込んでいたが、多くのメンバーをマネジメン

トすることは不可能であることに代表になって初めて気づかされた。その中で、主体的に行動してくれるメンバーや企画を立てて実行してくれるメンバーを見て、チームワークの大切さを改めて痛感した。また、企画を提案してくれたメンバーに対して、どのようなアプローチが適切か（ボラチャレの企画として実行するか、関係団体と共催で実行するか）、などの後輩への育成に関心を持った。

以上の点から、大学3年生で自身の将来を考える上でこのボランティアチャレンジの経験が役立ったと感じる。理由としては、自身の強みと弱み、そして何に関心があるのか、団体運営を通じて理解することができたからである。このような貴重な機会を与えてくださったボランティアセンターの方々、関係団体の方々、そして MGC のメンバーに感謝を伝えたい。

今後に向けて

MGCloset の今後の展望について、団体としての視点と私個人の視点から以下のような活動をしていきたい。まず、団体としては引き続き、SNS を利用したエシカルファッションの認知度向上に努め、定期的な広報活動を行う。また、ボラチャレ内での他団体との関わりや外部団体（NGO グリーンピースジャパン）等の関わりを活かし、今後も共催でイベント運営を行っていきたいと考えている。加えて、来年度は新たな試みとして、小中学生に向けたエシカルファッションの普及活動の実施をボラチャレ経由で企画している。よって、来年度は「教育」をメインに活動を展開していこうと考えている。

次に私個人の今後の展望について、2 年生以下の「団体運営」のノウハウを共有する教育活動に着手したい。具体的には、MGC に参加を考えている学生に向けた説明会の運営方法や企画の進め方、団体マネジメントについて自身の経験を 2 年生以下に共有したい。以上の 2 点を今後の団体活動の中で行っていきたいと考えている。

（国際学部国際学科 3 年）

◇海洋保護プロジェクト

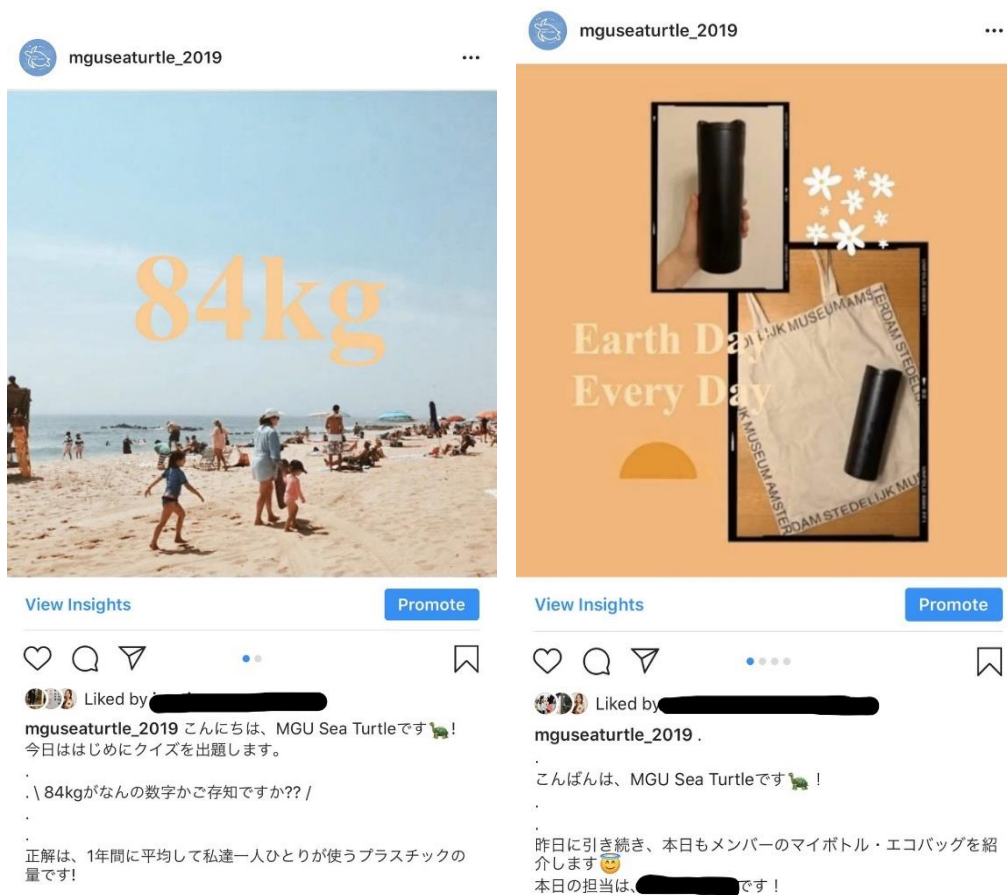
プロジェクト名	海洋保護プロジェクト～Substitutes for Plastics～
団体名	MGU Sea Turtle
企画の目的	海洋環境保全、プラスチック問題改善、海洋生物保護のために、明学生の環境に対する意識を変えることを目的に活動。

実施概要

OSNS(Instagram)での活動

コロナ禍において、対面での活動が出来なかった。より多くの人に海洋環境問題を知ってもらうため、また、自分たちの海洋環境に対する関心を掘り下げ、学習するために、SNS で以下のことを企画し、実施した。

- ・環境海洋系の記事の投稿
- ・海洋環境系のクイズの投稿
- ・マイボトル、エコバッグ紹介リレー(メンバーのマイボトルやエコバッグを紹介)
- ・お家でできるエコ活動(Stay home 企画。メンバーが各自調べて投稿)
- ・地域別環境対策(国や地域ごとの環境対策を紹介)
- ・大学生が自由研究やってみた！(環境問題に関する自由研究)



○第1回オンラインワークショップ

開催日時：2020年7月18日(土)14:00~16:00

ゲスト：アクアマリンふくしま 岩田雅光さん((公財)ふくしま海洋科学館海・生命の進化統括学芸員)

対象：明学の学生団体(主に MGU Sea Turtle)をメインの参加メンバーとして開催した。

共催：明治学院大学 LLTS プロジェクト

参加人数：10人程度

備考：高桑先生にご協力していただいた。

内容：当初、白金祭に向けて準備していたが、中止になってしまったため、方向転換しオンラインワークショップを開催した。ワークショップでは、岩田さんにマイクロプラスチックや海洋生物がそれによって苦しんでいるような実態、そして岩田さん自身の仕事内容などをお話ししていただいた。参加者は、岩田さんのレクチャーの後、ディスカッションし、「海洋生物を守るために私たちにできることは何だろう」というディスカッションテーマのもと、話し合った。

参加者の反応と振り返り：

「今すぐに海洋環境を変えることはできないかもしれないけれど、自分たちの子供たちの為にきれいな海を残したい」や、「マイボトルを欠かさず持ち歩きたい」などの意見が出た。少人数だからこそ、発言できる機会が多かったのが、有意義なワークショップになった。



○第2回オンラインワークショップ

開催日時：12月26日(土)14:00~16:00

テーマ：持続可能な社会 with コロナ

共催：NAMIMATI (なみまち)：SDGs に基づいた環境活動をしており、経済×環境問題をモットーに講演や活動などを行っている団体

参加人数：10人

内容：with コロナの時代において、今できることや環境保護活動をレクチャーやディスカッションを通して考えるオンラインワークショップ

参加者の反応と振り返り：

- ・意見を交換したり吸収できる機会は、コロナ禍になってさらに減少していると思うので、オンライン上でさまざまな立場の方とこのような機会を設けられたことは非常に有意義な時間になったと思います。
- ・自分できるエコ活動(エコバッグ、水筒)などを率先して行い、周りの人にも環境にできることを自主的に発信できるようにしていきたい。NAMIMATI さんの話を聞き、企業を巻き込んだ環境に配慮した取り組みをすることができればよいと感じる。



- ・大きな波を作るには個人だけでなく、行政や国の力も必要だと思った。だけど、その大きな波を作るためには、個人やローカル、NPO の力が絶対に必須だとも思う。ひとりひとりはともちっぽけな存在で、できることは限られているかもしれないけれど、その個人レベルでの意識改革が大きな波のはじまりだと思いました。

感想・活動を通して得た学び

2020 年の MGU Sea Turtle の活動内容として、元々、白金祭や戸塚まつりに出店する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により、活動内容を変更し狭めざるを得なくなりました。しかし、その中でも私たちは知恵を絞り、SNS での活動や企画、オンラインでのワークショップを二度開催するなど、活動は十分にできたと思います。奨励金は使いませんでした、使わずとも、このように活動がコロナ禍で可能だということが分かりました。

MGU Sea Turtle としてこの団体を立ち上げた目的は、海洋環境保全、プラスチック問題改善、海洋生物保護のために、明学生の環境に対する意識を変えることでしたので、そういった面では、決して多くはありませんが、明学生に私たちの伝えたかったことを伝え、訴えることができたのではないかと思います。

海洋環境について多くのことを学べたことはもちろんですが、ボランティア団体のあり方や、運営の仕方も特に NAMIMATI さんとのミーティングを重ね、MGU Sea Turtle のメンバーそれぞれが学ぶことができました。一回目のワークショップは少人数規模で行いましたが、少人数は少人数なりに得るものがありました。特に、質問がしやすかったり、よりアットホームな環境でワークショップが行えるのはいい点であると思いました。二回目のワークショップは同じくアットホームなオンラインイベントですが、これまでにコラボしなかったような団体と共催という形で開催することができ、とても新鮮な経験になりました。

今後に向けて

今後の活動として、代表の寺島の代では一応終了となります。しかし、もし継ぎたい人がいるならば、また活動をしていきたいと MGU Sea Turtle は考えています。コロナ禍において奨励金が多くななくても活動が出来るということはとても良い経験でしたので、これからまた活動をしたいと考える方に伝えるべきことだと考えます。環境問題が完全に解決されることは難しいですが、学生は学生らしい活動で、知識を広めたり、考える機会を持つことが重要なのではないかと考えているので、今後の活動や生活に今回の経験をメンバーそれぞれが活かせればと思います。

(国際学部国際学科 3 年)

◇対話 Open Dialogue

プロジェクト名	対話 Open Dialogue～学びと実践のボランティア～
団体名	18psychology
企画の目的	ボランティア実践を行なう意味や意義を捉え直し、自分にとってのボランティアを考える。また、どのようなボランティアをする上でも役に立つ傾聴や対話の心構えを学ぶことを目的とする。

実施概要

新型コロナウイルスの影響に伴い対面での実施が困難であるため、全面オンライン（Zoom）にて大学プログラム「1 Day for Others」での実施をした（2020年11月22日に実施。詳細は1Day for Others 報告を参照）。講師として長井雅史さん（SFC 研究所上席所員、『対話のことば オープンダイアログに学ぶ問題解消のための対話の心得』著者）をお招きし、対話についての知識の共有と対話の時間のファシリテーターを担っていただき、対話の学びと体験の時間を作った。当日は1～4年生まで参加し、学部も多岐に渡った。

当日の流れとしては、①チェックイン（自分にとってボランティアを一言ずつシェア）、②対話のことばを使った長井さんからのレクチャーと自分らしい対話に出会うワーク、③企画学生3名よりこれまでのボランティア実践のストーリーテリング、④ワークショップとして、「自分にとってのボランティアとは、ボランティアの意義」「コロナの状況が明けた時にどんなボランティア実施をしたいか」「全体対話、共有」を行なった。

全体として対話的なワークショップを実施し、対話の体験と学びの要素を取り入れた。その対話の内容としてボランティアへの意義や意味、思いなどを設定した。それによって、ボランティアを実践したことがある人もない人も、共に多様な声に触れることで起きる考えの深化を期待し、実施を行なった。

感想・活動を通して得た学び

今回のプロジェクトから大学生のニーズが見えてきたと考えられる。それは、自分のことを安心して開示することができるような場へのニーズであると感じた。

今回のテーマはボランティアに重点が置かれていた。そのため、ボランティアへの考えが深まったり、価値観の変容が起きたりしていた。しかし、それだけに限らず、それぞれにとって今必要な体験が現れていた。講師としてお招きをした長井さんのご尽力もあり、場に安心・安全の雰囲気共有され、ボランティアに限らない個人的なこれまでの経緯の話に苦しみや葛藤が表れていた。このような体験が起きた要因は単一ではなく、様々な要因によるものであると思う。

例えば、主催している側が積極的に自己開示をしたこと、集団の力動による力、明治学院大学の大学生という共通項を持っていたことなどが挙げられると考えられる。しかし、それ以上に青年期を生きる大学生であるということが影響していたと考えられる。青年期という悩みの

多い時期にさらにコロナ渦によるストレスなどが積み重なり、どこにも表現することのできない苦しみや思いがあったのであると考えられる。そのような時にこのような対話の場が開かれたことで少しの時間ではあるが、安心感のもとで自己開示が起きたのであると思う。

今後に向けて

今回の場を通して、私達自身も対話の場を学び、体験した。その経験を通して、大学生への対話の場の必要性があると強く感じた。日常の生活では中々人に打ち明けられないことも対話の場に参加することで言葉を出すことができ、少しでも気持ちが楽になる体験が起きると感じる。学生相談という場はあるが、そこに足を運ぶことは人によっては困難に感じると思われる。そのような学生のためにも、対話の場を開くことが必要になるのではないかと考える。そして、そのような場を体験することがボランティア実践をした際に、相手への傾聴の姿勢や対話的な態度として現れてくると考える。そのため、継続的に「1 Day for Others」などの場を使い対話の場を開いていけると良いのではないかと考える。

(心理学部心理学科3年)

◇郡上おどり

プロジェクト名	郡上おどり in 戸塚学生プロジェクト
団体名	チーム MG 郡上
企画の目的	私たちのプロジェクトでは、私たちの通っている「明治学院大学」と大学のある「横浜市戸塚区」における『顔の見える関係』が郡上おどりを通じて互いに構築して行く手助けをすることを目的としている。昨年度郡上から来ていただいた方々と戸塚の方々との間に、熱意の差が浮き彫りになったため、そこを考慮し違った方向で活動を行う。また、私たちが昨年度の活動からの問題点でもある戸塚地域に老若男女が集うコミュニティというものがないという点も一種の社会問題と言える。そこで、引き続きコミュニティの提供をし、さらに地域の活性化に貢献もしていく。そして、私たち団体は、私たちの好きな郡上おどりを多くの人に知ってもらい、大きな「縁」が広がることも目的として活動します。

実施概要

今年は新型コロナウイルスの影響で一切の対面で行う活動はできなかった。そんな中でも初めての試みとして行なったのは、「おうちで郡上」という形でメンバーそれぞれが室内で浴衣を羽織り、踊った映像をインスタグラムの方で公開するということである。これは、外での活動が制限される中、郡上おどりを広めることを目的としたものである。また、Zoomでのオンラインミーティングを4回ほど行い、自分たちが置かれている状況と何ができるかということを考え、郡上踊りというものに対し、向き合う時間となった。

感想・活動を通して得た学び

やはり、郡上おどりの良さである、円になること、縁を結ぶことの大切さを改めて実感した。この状況に対して、何もアクションを起こすことができなかったのは非常に残念ではあった。だが、離れていても郡上おどりというものを通して、郡上の人たちと繋がることができるということがわかり、これは今後やこれからの郡上おどりを考えていく上で非常に大きな手立てとなるという経験を得られた。

今後に向けて

今後、新型コロナウイルスが収束するまで、例年のような徹夜踊りなどをすることができないと考えると非常に残念である。来年以降、引き継いでいける後輩たちの存在がないことを課題に、できれば郡上おどりの縁を紡いでいきたいと考えている。

(国際学部国際学科3年)

ボランティアファンド学生チャレンジ 2020 採択団体一覧

2020 年度の募集は「社会課題にチャレンジ!」をテーマとし、書類審査・面談を経て 4 プロジェクトが採択された。助成団体は以下の表のとおりである。

2020 年度助成企画

プロジェクト名	団体名	助成金額
ぬいぐるみ旅行で旅行気分！	りもぐるみ	¥200,000
MGsChool	MGCloset	¥50,500
子どものよさを伸ばすには？～子どもの発達 や支援の面から～	障害児医学ゼミ 18pe	¥140,000
ガールズフェスティバル	UP!UP!UP!	¥57,000

5 いつでもボランティア・チャレンジ（通称：いつボラ）

「いつでもボランティア・チャレンジ（略称：いつボラ）」は、本学在学中の学生・院生が自ら企画したボランティア（社会貢献）を实践したいと思った「その時」に申請できる援助金制度である。今年度はコロナ禍の影響が大きく、いつボラの申請も2件と少なかった。

1件は、環境問題に関わる学内でのイベントを企画するものであった。申請し面接を行うところまでは進めたが、コロナによる活動の制限について見通しが立たない状況が続いていたことから、申請を取り下げることとなった。この申請では助成にはつながらなかったが、この団体はその後活動内容をオンラインイベントやSNS発信に変えて活動を続けており、その後にボラチャレ団体として採用された。助成に結びつかなくてもいつボラとしての試みが無駄にはならず、さらなる発展に結びついた例であるといえる。

もう1件は、面接の結果助成が決定した。団体名「りもぐるみ」による、「コロナ禍でも安心！ぬいぐるみ旅行で旅行気分！！」である。今回「りもぐるみ」の活動の対象となった「ホープフルハーツ」は、私の自宅がある岐阜県下呂市の障がいのある方とその家族の会である。地域で暮らす幼児から成人までの幅広い年齢層の方とその家族が集まって、季節の行事などを楽しんでいる。バーベキューの会、クリスマス会、スキーマの会など賑やかに活動を続けてきたが、昨年はコロナ禍によって全ての活動が中止となった。さらに子ども達は学校も休校になり、誰もが寂しく辛い思いをしていた。

そこに声をかけてくれたのが「りもぐるみ」のグループであった。最初は「ボランティア・市民活動論」の授業を通して学生と「ホープフルハーツ」の会員がオンラインで交流を行い、画面越しでもお互いのことを知り、親しさを感じることができるようになってきた。その学生からの発案により、ぬいぐるみ旅行を行うグループを「いつボラ」を利用して立ち上げた。

「自分の大切な人形やおもちゃを大学に送れば、代わりに旅行へ連れて行ってもらえる」という誘いは、「ホープフルハーツ」の会員も最初はイメージが持てなかったようである。しかし、待つこと2ヶ月、手作りのアルバムが一人一人に送られてきた。アルバムを開くと、自分の人形が仲間の人形達と一緒に、東京タワーを見上げていたり、明治学院大学のチャペルでパイプオルガンに耳を傾けていたり、鎌倉や横浜の観光名所を訪ね歩いたり…アルバムを受け取った誰もが自分が旅行に行った気分になって楽しむことができたようである。

「ホープフルハーツ」の会員達は、いつの日か本当の旅行に出かけてこのアルバムを作ってくれた学生達と実際に会って一緒に活動できる日を心待ちにしている。

（ボランティアコーディネーター 田口めぐみ）

コロナ禍でも安心！

ぬいぐるみ旅行

で旅行気分！

【活動報告】

11月8日、14日にぬいぐるみ旅行を行いました！

【活動内容】

様々な理由で旅行に行く事が困難な方（主に障害のある方や高齢者）に、全国各地の旅行先の観光、文化、伝統芸術に触れた旅行体験をぬいぐるみを使って行います。こうすることで、ぬいぐるみを介した温かい人とのつながりを作り、人が移動しない形でのネットワークの形成・拡大を目指しています！

具体的には、参加者にぬいぐるみの名前やヒストリー、希望の撮影場所をお聞きした上で、ぬいぐるみを私たちのもとに送っていただきます。そして、参加者のぬいぐるみに対する思いや、ぬいぐるみの背景にある物語を認識した上で、私たちがおすすめする旅行先に連れていきます。各スポットでは、ぬいぐるみが実際に旅行をしているように工夫しながら撮影を行い、その後撮影した写真を入れたアルバムを手作りし、ぬいぐるみとともに参加者のもとに届けます。届いた後、参加者と私たちでZoomなどを使用し、交流会を開催することで、感想や行った場所の紹介、ぬいぐるみの話など、会話をしながら親睦を深め、ネットワークを形成します。

【活動の背景と目的】

このプロジェクトはボランティア市民活動論の授業で生まれました。コロナの影響で、人との交流が失われたり、旅行に行くことなどが困難になったりする中、私たちが授業を通じて交流している岐阜県下呂市の障害当事者団体の方々から、「コロナ禍でオンラインでのつながりが増えたが、ZoomやLINEを使えない方々は人との交流の機会が失われてしまった」という意見を聞きました。

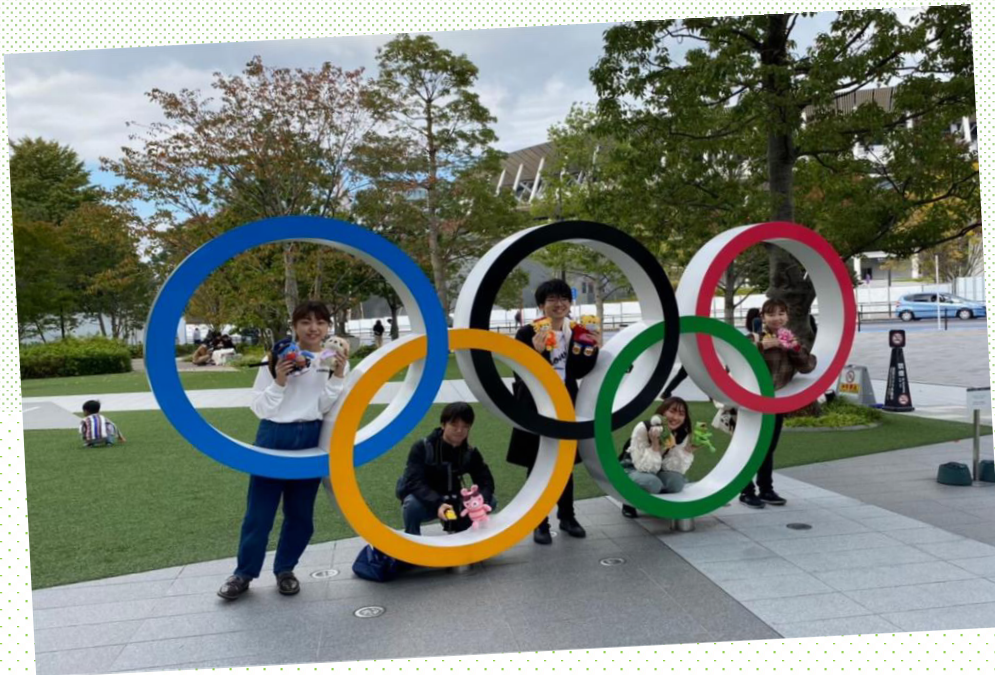
そこで、そのような人にも、コロナ禍で別の地域に住んでいることを生かしたエンターテインメントを提供したいと考えました。具体的には、皆さんが大切にしている、自分の分身のようなぬいぐるみを私たちが代わりに旅行に連れていくことで、自分が旅行に行った気分を味わえるのではないかと考えました。コロナ禍の閉塞した時代の中で、いかに実際人が動かない形でのネットワーキングによるソーシャルキャピタルの形成が可能なのか、限界を突破すべく、多角的に挑戦を続けていく事が目標であり、その形成を目指す事が目的です。



【活動の課題】

旅行をする際、天候の影響で当初の計画通り活動が進まず、さらにアルバム作成にも時間がかかってしまい、参加者の方にぬいぐるみをお返すのが遅くなってしまい、心配させてしまいました。そのため、以降は様々なトラブルを見据えたうえで計画を立て、参加者の方にご心配をおかけしないように、そしてなるべく早くお返しできるよう、心掛けていきたいです。

また、現在コロナの影響で遠くへ旅行するとリスクがあるため、旅行先が活動メンバーの住む地域周辺になってしまい、参加者が希望する旅行先に行けていません。コロナが収まってきたらなるべく参加者の希望する旅行先に行けるようにしたいです。



【活動を通して得た学び】

ボランティアを行う際、「人を楽しませる・喜んでもらえる活動」を第一に考え、その考えが人を楽しませることだけでなく自分たち自身が楽しんで活動できることに繋がり、ただ何かをもたらしただけではないコミュニティが生まれたことを実感しました。ボランティアという形は等価交換を前提にしていません。しかし、自らが能動的に動くことで等価交換以上の充実感や幸福感を得られるのです。そして、一緒に活動する「仲間」と協力し合うことで一つの答えに縛られない相手に寄り添った活動を生み出すことができ、コロナ禍で実際に会えないなどどんな環境でも人と人が繋がり、繋がった人と人とがボランティアを通して楽しみを分かち合えるということを私たちはりもぐるみの活動を通して学びました。

Produced by りもぐるみ

6 1 Day for Others (1 日社会貢献プログラム)

2011 年度よりスタートし、2020 年度にて節目の 10 年目を迎えた「1 Day for Others」であるが、新型コロナウイルスの影響で例年どおりのプログラムを実施することが出来なかった。学生たちが「1 Day for Others」の「キャンパスを飛び出して、その一日、新しいことを知る、見る、行動してみよう」というコンセプトである「キャンパスから飛び出す」ことは疎か、感染のリスクを避けるため「キャンパスに来る」ことが、特に春学期中は大きく制限された。

秋学期に入って一部授業は対面で実施されたものの、ボランティアセンターとしても対面でのボランティア活動については、リスクを防ぐため、やむなく活動自粛の継続を要請した。そのうえで「1 Day for Others」も春学期は「全面中止」とし、秋学期は一部のプログラムのみ限定的に「オンライン」でのプログラムを開催することとなった。完全オンラインでのプログラムの実施は、10 年続く「1 Day for Others」の歴史の中でも初めての試みであったが、受入先の皆様のご尽力により、10 のプログラムを実施することができ、延べ 115 名の学生がプログラムに参加した。まずはお受入いただいた団体の方々に感謝申し上げたい。

プログラム内容は、これまでの体験を伴う活動中心のプログラムというよりは、社会課題を知り、参加者同士で考え学ぶ、座学やグループディスカッション形式のプログラムが多くなったことが特徴である。特に環境や福祉の分野を中心に参加学生の活発な議論が広げられた。あるプログラムでは、課題に対してより深く継続的に考え、アクションを起こしたいという想いから、参加学生の中の一部で、学生団体を発足させて学内での活動をスタートした事例も生まれ、学生の社会課題への意識やボランティア活動に対する意欲の高さを感じることができた。

また、岐阜県下呂市の障がい者当事者団体「ホープフルハーツ」および障がい者支援団体「益田どんぐりの会」と協働したプログラム実施も、2020 年度の特筆すべき点として挙げられる。「1Day」という一日という制約の中でのプログラムを本学のキャンパスを有する東京都、神奈川県および、それに隣接する埼玉県、千葉県のいわゆる 1 都 3 県以外の団体と行うことは、今までの対面でのプログラム実施では、現実的ではなかったが、上述の岐阜県の団体とのプログラムの実現は、オンラインシステム活用の賜物であり、大きな成果であろう。

新型コロナウイルスの感染収束が見込まれない中で、受入先団体のニーズに関わらず、ボランティア活動には多くの制限がかかっており、社会課題と出会う機会が極端に少なくなってしまうが、岐阜県の団体との交流プログラムは、新たなプログラムを開発していく上での大きなヒントになった。一方で、対面での活動でしか味わうことのできない、リアルな人と人との関わりや現場の臨場感があることも事実である。対面でのプログラムが段階的にでも再開することができた場合に向けて、参加者への注意喚起の徹底方法の確立や独自のガイドラインの作成などの体制づくりが急務である。

2021 年度も春学期は引き続き、オンラインでのプログラム実施を継続することが決定して

いる。オンラインという新たな形式の発掘は、今後の「1 Day for Others」が学生にとって、多様な選択を生み出し、更なるボランティア活動においての意欲の向上につながるツールであるという可能性も感じる事ができた。今まで凡そ右肩上がりであった「1Day for Others」の参加者とプログラム数が激減してしまった2020年度ではあったが、上述のとおり、多くの収穫もあった。with コロナの状況は今後も続くことが予測されるが、収穫や教訓をいかしながら、2021年度のプログラム運営に注力していきたい。

(職員 青木洋治)

◆オンライン講座で学ぶ「やりたいことみつける！ボランティアのい・ろ・は」

受入団体	とつか区民活動センター
実施日	2020年10月10日(土) 10:00-11:30
参加学生	8名(1年生8名)
実施概要	戸塚区の市民活動・生涯学習活動・ボランティア活動などの拠点として地域の活動をサポートしているとつか区民活動センターの専門スタッフより、ボランティア活動の大切な基礎知識について、学び、参加者同士で自らの経験や活動などを話し合い、自分たちにできる活動を考えて。
参加者の声	今回の講座で、活動を長く続けるためのコツとして、相手への思いやりと、自分が活動を楽しむことが紹介されて、納得しました。また、自分が楽しむだけでなく、安全性を第一に、自分のできないことははっきり言うことも重要だと感じました。今後は、地域に根付いた活動を始めてみたいです。様々な種類の活動が写真とともに紹介されていましたが、どれもご高齢の方が多いと感じたので、その活動を長く続けていくためには、大学生もかかわっていくべきだと感じました。(社会福祉学科1年)

◆対話 Open Dialogue ～学びと実践のボランティア～

受入団体	ボラチャレ団体 18psychology
実施日	2020年11月22日(日) 9:00-13:00
参加学生	10名(1年生5名、3年生4名、4年生1名)
実施概要	ボランティアチャレンジ団体「18psychology」の企画プログラム。ボランティア経験の有無に関係なく、参加者自身が今後のボランティア実践について深く考え、それを表現する場を作った。まず、発達障害児支援、海外にルーツを持つ子どもの教育支援、精神障害者支援のボランティアを行なってきた学生たちの話を聞き、ボランティア活動による学びについて考えた。その話しを手がかりに参加者各自が行いたいボランティアを、対話を通して考えた。最後に、ボランティアや人との関わりにおいて大切な傾聴や対話の心構えについて、専門家である講師にお話しいただき、参加者同士で傾聴を体験しながら学びを深めた。
参加者の声	・対話や傾聴について、興味・関心のある同世代がこんなにもいたこと

	が驚きでもあり、嬉しかったです。また、人にはそれぞれのバックグラウンドがあり、そうした色々な思いを大切に、対等に、コミュニケーションするのが、対話であることを学びました。(参加者アンケートより抜粋) ・相手の意見を受け入れることばかりに集中して自分の考えを失ってしまわないようにすることも大切であると学んだ。また、年齢や性別に関係なく対等な立場で話し合える仲間がいるということが、普段生きている中でなかなかないことであり、かつとても大切であることがわかった。(参加者アンケートより抜粋)
--	--

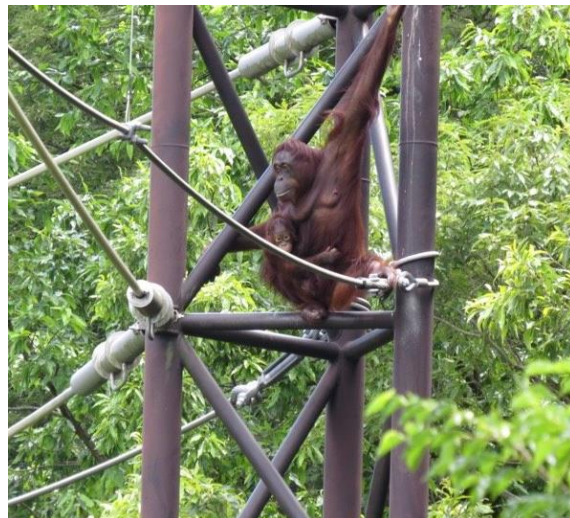


◆Remake your clothes! 思い出の洋服をエコバッグへ

受入団体	一般社団法人 グリーンピース・ジャパン
実施日	2020 年 11 月 28 日(土) 13:00-17:00
参加学生	13 名(1 年生 3 名、2 年生 8 名、3 年生 2 名)
実施概要	ファストファッションに関わる環境問題について学び、テーマに基づいてグループでディスカッションし、話したことを発表した。その後、参加者各自が用意した古着でバッグを作りながら、ファストファッションと環境問題について現状や課題を学んだ。
参加者の声 サポート学生	このイベントを通して、社会問題に関心を持ってもらうには、やはり実際に楽しんで参加してもらい問題について学んでもらうことで「自分事化」することが必要であると感じました。社会問題を自分の生活に落とし込んで考えてもらい、今後の生活に繋げてもらえるようにするということを重視し、イベントを作り上げました。企画の段階から、あくまでも“楽しみながら”、自分の身の回りの生活を見直すきっかけになればという思いで実行できたため、かなりの達成感があります。開催した側もたくさんの気づきを得ることができる 1 Day プログラムに携われたことは貴重な経験となりました。(国際学科 3 年)

◆SDGs から学ぶボルネオ島の環境問題

受入団体	特定非営利活動法人 ボルネオ保全トラスト・ジャパン
実施日	2020 年 12 月 2 日(水) 13:30-15:00
参加学生	19 名(1 年生 8 名、2 年生 9 名、3 年生 1 名、4 年生 1 名)
実施概要	最初に SDGs が提唱された経緯や背景についての講義があり、その後、ボルネオ島における環境問題と私たちの生活との関係性や SDGs の掲げるゴールと社会のあり方を参加者で考えた。またボルネオ保全トラストジャパンの活動について聞き、NPO や国際協力について学んだ。
参加者の声	・ 今まで環境問題が世界で騒がれていることは知っていたけれど、自分からこうして積極的に情報収集することをしていなかった。実際に活動を始めるとはまだまだ至らない点が沢山あるので、環境問題の知識を更に身につけたり、進んで環境に優しいものを購入するなど今できる小さいことからやってみようと思う。(参加者アンケートより抜粋) ・ 一見緑豊かに見える土地でも、その緑がプランテーションによって造られた緑であったら、自然ではないということを学びました。緑だと、なんだか環境に良さそうと感じてしまいがちですが、環境を破壊する緑があるということに気がきました。(参加者アンケートより抜粋)



森林開発の犠牲になるオランウータン

◆SDGs をテーマにゲームやクイズで小学生と遊ぼう！

受入団体	社会福祉法人 興望館
実施日	2020 年 12 月 8 日(火) 15:20-17:30
参加学生	4 名(1 年生 1 名、2 年生 1 名、3 年生 2 名)
実施概要	明治学院大学横浜校舎のコラボルームの大画面を使って、学童クラブの子どもたち（主に小学 3 年生）とオンラインでつなぎ、共に遊びながら学べるプログラムを企画し実施した。参加者の自己紹介や特技披露のあと、SDGs に関連するクイズをして交流を深めた。
参加者の声 サポート学生	興望館との 1 Day for Others 企画を通して、ボランティアにおける目的、目標に対するアプローチは 1 つではないことを実証できたのではないかと考えます。この企画のような交流を目的としたイベントだと、オンライン上でのコミュニケーションのみでは熱意や伝えたい思いが相手に伝わらないと考えられることが多いですが、当日の子供たちが楽しんで参加してくれている様子から、私達の「相手を楽しませたい」という思いは伝わったのではないかと感じました。一方で、子供たちと 1 度も会わずに企画を考えなければいけなかったこと、子供たちのサポートを直接できなかったことなど、オンラインならではの難しさも実感しました。（国際学科 3 年）



興望館の子どもたちと大画面でつながる



大画面に向かって自己紹介をする学生たち

◆命のボランティア講座

受入団体	神奈川県赤十字血液センター
実施日	2020年12月12日(土) 10:00-11:40
参加学生	17名(1年生10名、2年生7名)
実施概要	神奈川県赤十字血液センターより、「命のボランティア講座」として、赤十字社の重要な活動である「献血」についてオンラインでお話をいただいた。参加者は、献血について知識を身につけた後、グループワークを通して、献血に関する質問や意見を出し合い、若年層の献血機会向上のためにできることについて考え、発表した。
参加者の声	このプログラムに参加していた人たちの多くがもう既に献血を行っていたり、献血ルームに行ったことのある人たちであった。私は自分の日々の生活を考えるだけで精一杯となっているが、他の人は献血を必要としている人のことを考え、自分の血液や時間を奉仕していて、その行動力に驚いた。また実際に献血によって救われた人の話を聞いて、献血の必要性をより実感することができた。献血の使用期限は短く、常に新しいものが必要であるなど、知っておかなくてはいけないことを学ぶことができた。(法律学科2年)



Twitter で参加者を募集

◆「割り箸」ってエコなの！？日本の森林を考えるきっかけを

受入団体	認定特定非営利活動法人 JUON NETWORK（樹恩ネットワーク）
実施日	2021年2月5日(金) 15:00-17:00
参加学生	14名(1年生5名、2年生8名、4年生1名)
実施概要	JUON NETWORK 事務局長より、JUON NETWORK の組織や活動について講義いただいた。その後、事業のひとつであり、本学横浜生協でも使用されている「樹恩割り箸」について、その認知度向上のためにできることをグループワークを通して考え、提案を行った。
参加者の声 サポート学生	環境問題が深刻化し「環境問題への取り組み」が求められる中、それを理解しつつも今ひとつ身近に感じられずにいました。しかし、今回のプログラムを通して、JUON NETWORK さんという存在があること、なにより明学の食堂で国産材で作られた樹恩割り箸が取り入れられていることを知り、抽象的だった「環境への取り組み」を身近なものとして捉え、具体性を持たせることができました。また、樹恩割り箸についての知識を深めるだけでなく、その知識や樹恩割り箸の存在を周囲に広めるための企画の考案を通し、「環境への取り組み」の第一歩を踏み出せた経験はとても貴重なものでした。この経験が無駄にせず、自分なりに「環境への取り組み」をしていきたいです。(心理学科2年)



JUON の「J」を指文字で作って記念写真



横浜校舎学食で使用している「樹恩」割り箸

◆Let's フェアトレード！フェアトレードとまちづくり

受入団体	逗子フェアトレードタウンの会
実施日	2021 年 2 月 25 日(木) 15:00-17:00
参加学生	14 名(1 年生 5 名、2 年生 5 名、3 年生 4 名)
実施概要	初めに、「この T シャツはどこから来るの？」というワークショップ教材をオンラインで実施し、児童労働による生産の現場と消費者である私たちとのつながりを体験し、複雑な流通の仕組みを学んだ。 その後、逗子フェアトレードタウンの会の活動についての話を通して、フェアトレードによるまちづくりの事例を学び、後半は、グループごとに、大学生として取り組めるフェアトレードの実践を考えた。
参加者の声 サポート学生	2 月初旬にフェアトレードに関するイベントの制作をボランティアセンターから提案していただき 2 月 25 日にイベントを開催しました。一ヶ月間という短い期間の中でいかにプログラムの内容を充実させ、参加者がコロナ禍の中でできる限り実践的に近い形でフェアトレードを学べる環境を作るか試行錯誤しました。 当日は、フェアトレードと児童労働を考えるロールプレイや大学生のできるフェアトレードをディスカッションしました。イベントを終え、一参加者としてこのイベントを作り上げることができ大変貴重な経験ができました。プロジェクトリーダーとしてイベントを携わることができ、ボランティアセンターはじめ参加者の皆さんに感謝いたします。(国際経営学科 2 年)



逗子フェアトレードタウンの会の活動紹介

◆サクラサケ！オンラインでつながる交流の輪

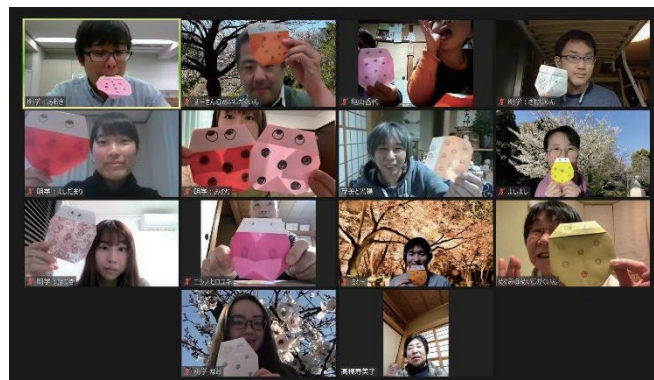
《第1回》地域での障がい者支援を知る

《第2回》お花見交流会

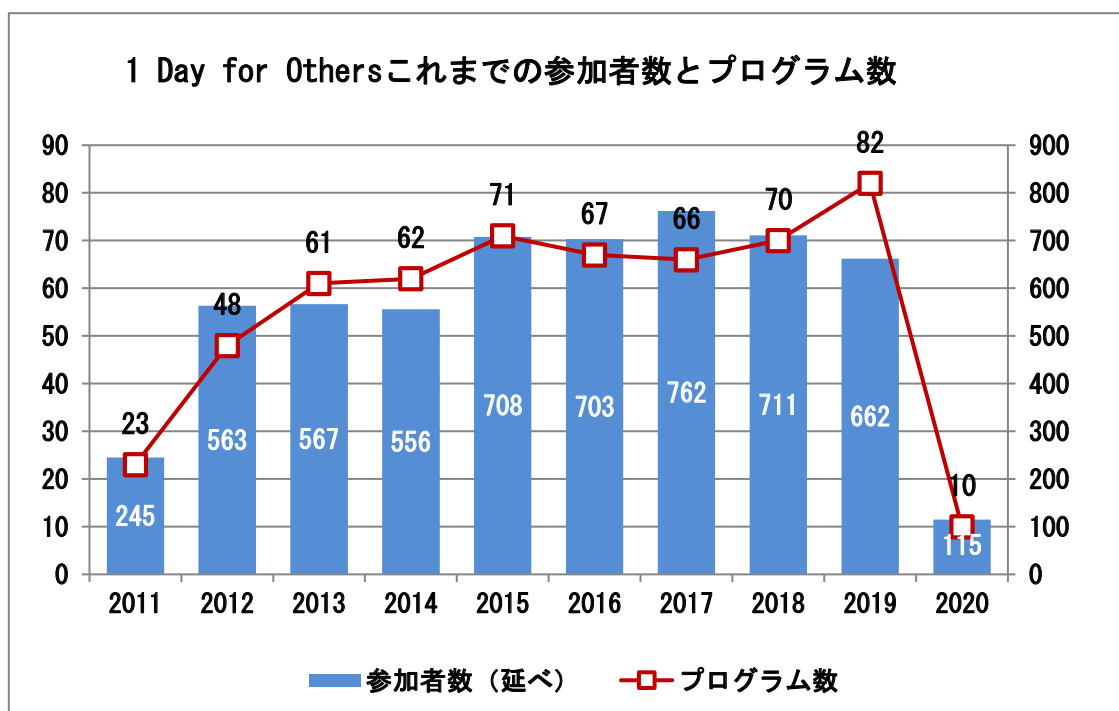
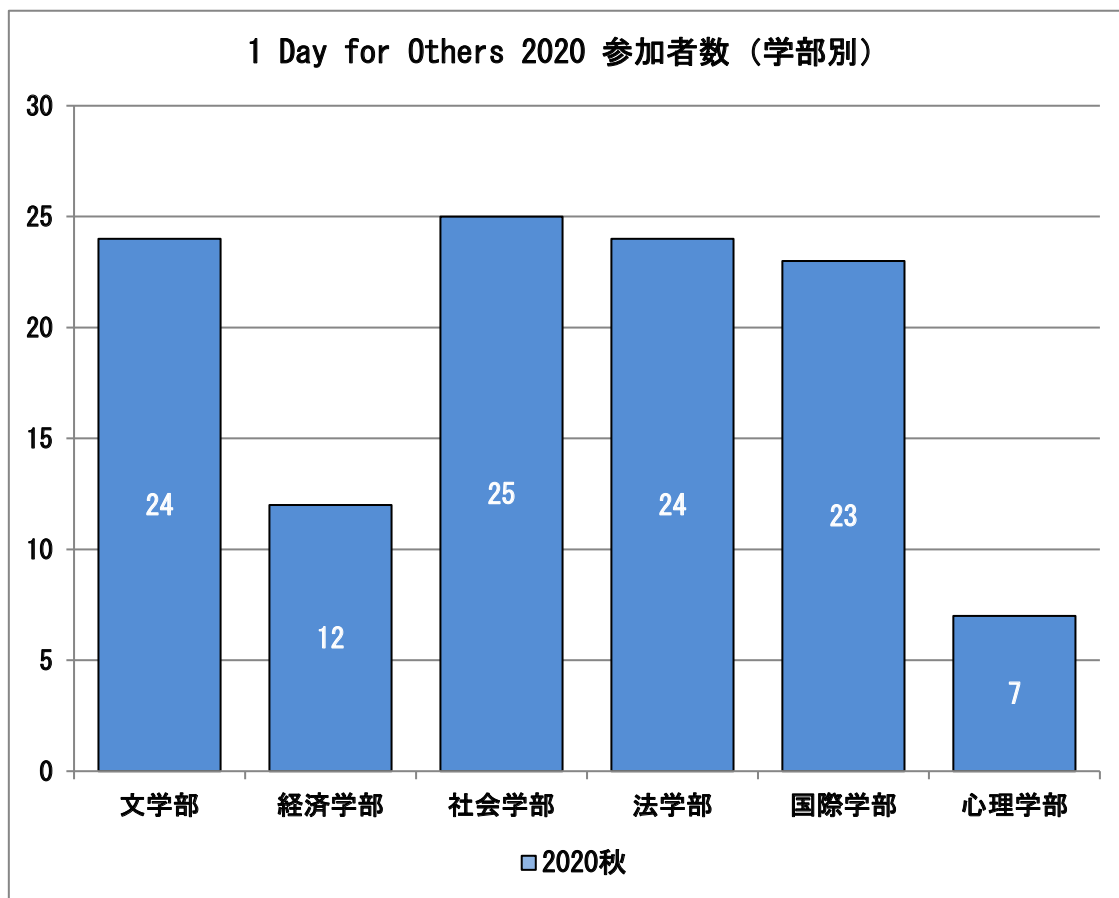
受入団体	ホープフルハーツ、益田どんぐりの会
実施日	第1回：2021年3月3日(水) 14:00-16:00 第2回：2021年3月24日(水) 19:30-20:30
参加学生	第1回：11名(1年生5名、2年生4名、3年生1名、4年生1名) 第2回：5名(1年生3名、2年生2名)
実施概要	新型コロナウイルスの流行に伴って、余暇活動が大幅に制限されることを余儀なくされている岐阜県の障がい者団体と交流した。第1回では、両団体の代表者より、その活動についてお話を伺った。第2回では、1回目に参加した学生が交流会企画を考案し、参加者の地元の桜や観光名所を紹介するお花見会と、折り紙や歌での交流を行った。
参加者の声 サポート学生	今回の本プログラムにおいては今までの1 Day for Others と違って、参加学生に企画段階から携わって頂き、どうしたら障がいのある方々がオンラインでも交流会を楽しんでもらえるかを考え、実施しました。自分達で創り上げていく事によって、さらに障がいについての考えを深める機会になったのではないかと思います。 そしてコロナ禍による外出自粛といったボランティアの実施が難しい状況の中でのこのプログラムの開催は大きな意義があったと思います。それは突然直面した大きな社会問題に対して解決していこうと負けずに努力する大切さです。これからもこのような形で学生が主体になって社会問題の解決に貢献していければいいと思いました。 (消費情報環境法学科2年)



折り紙で作ったてんとう虫



自分で折ったてんとう虫を持って記念撮影



7 ボランティア・カフェ（通称：ボラカフェ）

2020 年度春、新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言下でキャンパスに来られない学生のために、Web のツール（Zoom）を活用したオンラインの対話の場「おうち de ボラカフェ」を開設した。学年・学科を超えた学生同士の交流をはかり、上級生や学外ゲストのボランティア体験を聞くことで、社会課題について学びボランティアへの関心を高めることを目的とし、春学期は 5 月連休明けから 7 月まで、全 4 回開催した。

秋学期からはボラカフェの企画を学生に委ねることとし、企画ボランティアを募集したところ 10 名が集まった。関心分野によって二つのグループに分かれ、それぞれのグループにボランティアコーディネーターが付き添いながら、夏休みにオンラインによる企画ミーティングを行った。秋学期も対面授業が少なく学生をキャンパスに集めることが難しかったため、10 月と 11 月にオンラインによる「秋のボラカフェ」を開催した。企画した学生たちは、自分たちの企画を実現できたことが自信につながり、今後の活動への意欲が生まれたようだ。また、ゲストで話してくれた学生たちも互いの活動を聞くことで、コロナ禍での葛藤や活動を継続することの難しさなど、共通の課題を認識し共有する機会となった。

同時に、新入生が「友達ができない」と嘆いている状況を鑑みて、対面のボラカフェを定期開催することとした。学生コーディネーターが中心となり、毎週金曜日の昼休みと 3 時限目の時間を使って、ボランティアセンター（横浜校舎）に来訪する学生たちの自由な交流の場を設けた。その出会いの中から、一つのボランティアグループが立ち上がった。また、12 月には「ボラカフェ・クリスマス」のプログラムを学生コーディネーターが企画し、ボラセン横の畑作業や太陽光調理器を用いた焼き芋、ボランティアサークル「MG パール」によるマスクチャーム作りのワークショップを行なった。

（ボランティアコーディネーター 磯野昌子）

7. 1 おうち de ボラカフェ報告

<第 1 回>

日 時	2020 年 5 月 13 日（水）15:00-15:50
テーマ	明治学院のボランティアセンターってどんなところ？
参加者	学生（新入生）29 名、教職員 10 名
内 容	はじめに、猪瀬ボランティアセンター長補佐によるミニレクチャー「大学でボランティアをすることの意義」をおこなった。次に、ボランティアセンターの施設やプログラム、利用の仕方などをパワーポイントの写真を見せながら紹介した。後半は、グループごとの交流会とし、自己紹介、自粛を強いられている生活の現状についての意見交換、各自のボランティアの経験、これからしてみたいことなどを自由にトークした。

参加者の声 (アンケート)	・ボラセンについて紙だけでは分からなかった様子が伝わって行きたくなった。大学では学生が自主的にボランティアを企画できるのだと分かった。 ・他学科の人と交流ができて友だちができたのが嬉しい。もっと時間が欲しかった。
------------------	---

<第2回>

日 時	2020年5月27日(水) 15:00-16:00
テーマ	コロナ禍の今できるボランティアとは？
参加者	学生23名、教職員7名
内 容	ボランティアファンド学生チャレンジに取り組んでいる上級生たちを中心に学生団体（①MGCloset、②MGU Sea Turtle、③JUNKO Association、④郡上踊り in 戸塚学生実行委員会、⑤吉里吉里）の活動紹介をしてもらった。特に、現在のコロナ禍でオンラインを活用しながらどのような活動をしているのか、またできないでいるのか、その試行錯誤について話してもらった。その後、4、5人のグループに分かれ、上級生のボランティア活動のきっかけについて新入生が質問したり、外出や対人接触を控えつつ「今できるボランティア」について考えた。
参加者の声 (アンケート)	・先輩方の様々な活動の様子やコロナウィルスによる活動自粛の影響と対策を聞くことができて良かった。どの活動も魅力的で、ボランティアの無限の可能性を改めて感じる事ができた。 ・様々なボランティア活動を知れて良かったです。このようなボランティアもあるのか、と勉強になりました。

<第3回>

日 時	2020年6月10日(水) 15:00-16:00
テーマ	今こそ、本を読もう！ 『ぼくはイエローで、ホワイトで、ちょっとブルー』（ブレイディみかこ著、新潮社）から多文化共生を考える
参加者	学生9名、教職員7名
内 容	在宅期間により本に出会い読書の習慣をつけることを目的に、2019年本屋大賞を受賞した『ぼくはイエローで、ホワイトで、ちょっとブルー』（ブレイディみかこ著、新潮社）を紹介した。同著は、英国に暮らす著者と息子を中心とする家族の日常を描いており、白人労働者階級と多文化な背景をもつ移民との衝突や、ジェンダーの多様性など、様々な社会課題を提起している。さらに、3人のコーディネーターが本のテーマに関する各自のエ

	ピソードを紹介した。後半は、2つのグループに分かれ、本の感想やコーディネーターの話を聞いて思ったことを共有した。
参加者の声 (アンケート)	・コーディネーターの話を聞いているだけでもたくさん考えられた。 ・日本でも多様性が広がるなか、受け入れていく考えを持つことを実践していけたらと思いました。 ・他の人とディスカッションする機会をいただけてよかった。自分とは違う経験を聞けてよかった。



ボランティアセンターから「おうち de ボラカフェ」 『ぼくはイエローでホワイトでちょっとブルー』

<第4回>

日 時	2020年7月15日(水) 15:00-16:30
テーマ	それでも、なぜボランティアをするのか？
参加者	学生15名、教職員12名、ゲスト1名
内 容	コロナ禍の中で経済的に困窮する人やサポートなしには生活できない人もおり、ボランティアが求められている現場がある。第4回は「夏休み前スペシャル」として、紛争地での支援活動などを行ってきた日本国際ボランティアセンター元事務局長の長谷部貴俊さんをゲストに迎え、困難な状況でもリスクを負って長年ボランティアを続けてこられた理由を、その活動の経歴からお聞きした。また、様々なボランティア活動に携わっている3人の在学生から、自分がなぜその活動を行っているのかを話してもらい、長谷部さんとの対談をおこなった。後半は、グループごとに、長谷部さんや学生の話聞いて思ったこと、自分はなぜボランティアをするのかについて語り合った。最後にグループで出た意見を全体で共有した。
参加者の声 (アンケート)	・ボランティアは誰かのためを思ってすることだと思っていたけれど、自分も楽しむことがボランティアなのだ気づくことができました。ボランティア活動をしたと思うけれどなにかから始めればいいかわからないと話した時に、「この回に参加していることで一歩踏み出しているよ」という言葉をかけてもらえたのがとても嬉しかった。

・長谷部さんの率直なお話を聞くことが出来て良かったです。また、様々な分野で活躍している同世代の学生のお話を聞いたことはとても刺激になりました。グループトークでは、ボランティアに関して興味を持っている学生と話せたことによって「ボランティア」に関して共に考えられたことが純粋に楽しかったし、自分自身もアウトプットする機会になったと思います。



アフガニスタンで活動する長谷部さんにお話を聞く



ボラセンの大画面モニター

7. 2 秋のボラカフェ報告

<第1回>

日 時	2020 年 10 月 14 日 (水) 15:00-16:30
テーマ	ボランティアのはじめかた～子どもに接するボランティアを中心に
目 的	・ 学生自身が企画を立てることで学生のニーズにあった内容とする。 ・ 先輩の活動状況を聞くことで、これからボランティアをしてみようという学生にとっての参考とする。
参加者	学生 16 名 (内ゲスト 4 名)、教職員 3 名
企画学生	3 名
内 容	はじめに、様々な分野のボランティア活動に携わっている上級生から、自己紹介を兼ねた活動紹介をしてもらった。①被災地で子ども支援、夏休みのサマースクールでの支援 (吉里吉里/S さん、I さん)、②障害のある子どもの休日の支援 (白金地域活動/F さん)、③戸塚地域の乳幼児とその保護者の支援施設での活動 (横浜地域活動/U さん) 次に企画学生がファシリテートをし、各ゲストにボランティア活動に参加したきっかけや理由、活動時に気を付けていることなどの質問をしなが

	ら話を深めた。ゲストからは、気を付けていることとして、「自分が目立たず、空気になるつもりで裏方に徹すること」や、「“障がい”を特別視していたが、実際に触れ合うことで自分の意識過剰な態度がわかり、普通に接することができるようになった」等、活動を通じて感じたことや意識変化などを話してもらった。 その後、全体を3つのグループに分け、ゲストおよびコーディネーターもそれぞれのグループに入り、自由に意見交換した。最後にグループディスカッションで出た意見を全体で共有した。
参加者の声 (アンケート)	・先輩方の具体的な体験談を聞いたことで、ボランティアをする上での注意点など新たな発見があったので良かった。ボランティアをする第一歩を踏み出すのは不安もあるが、やってみたいという気持ちが強くなった。 ・ボランティアにおいて大切なことについて話し合い、相手が自分の言葉をどう受け取るのかを考えることや、相手のニーズを考えるなど、求められていることをこなすだけでなく対等な立場で対話することが大切だと気付いた。 ・自分たちが一から作り上げて企画することからボランティアとは何かというテーマまで、いろんなことを学ぶことができた。また参加者や講師の方々が積極的に参加してくれたおかげでとても充実したボラカフェができた。(企画学生)

<第2回>

日 時	2020年11月11日(水) 15:15-16:40
テーマ	東南アジアの教育と国際ボランティア～私たちの住むアジアについて考えよう
目 的	・先輩の活動状況を聞くことで、これからボランティアをしてみようという学生にとっての参考とする。 ・国際的な社会課題を学び、自分事として考えられるようにする。
参加者	学生10名(内ゲスト2名)、教職員6名
企画学生	3名
内 容	はじめに、企画学生が世界の教育事情についてと、ゲストの活動地であるカンボジアとミャンマーに関連するクイズを行った。次に、二人のゲストより自己紹介、団体の活動紹介、現地の教育事情、個人の活動のきっかけ、活動経験、活動を通して気づいたことについてのプレゼンテーションが行なわれた。 ①JUNKO Association/Mさん

	JUNKO は国際学部 학생でありベトナムで交通事故にあった高橋淳子さんの遺志を引き継ぎ、ベトナムとミャンマー教育支援をしている。初めてミャンマーを訪れた時、「思ったより発展している」と思った一方で、出会った 15 歳の女の子に将来の夢を聞いた時、自分の無力さを感じた。自分は学校に行くのが面倒くさいと思っていたが、「好きなことは勉強」と答える子どもたちに教えられた。かわいそうだからではなく、仲良しに会いに行くために自分は活動を続けたい。 ②カンボジア教育支援団体ぽけっと／T さん ぽけっとは、カンボジアで図書普及、想像共有、保健衛生、日本語学校などの教育支援活動をしている。カンボジアの学校は午前か午後の二部制で時間数が短く、美術や体育などの副教科がなく、退学率が高い。これまで現地では図書普及の活動に携わり、現在はズームで日本語学校とつなぎ、日本の観光地を紹介するなどの活動をしている。活動を通して、自分の目で見ることの大事さを感じた。これからも「微力ではあっても無力ではない」という言葉を胸に活動していきたい。 ゲストへの質疑応答の後、2つのグループに分かれ、アジアのイメージや教育支援に関する意見交換を行った。
参加者の声 (アンケート)	・実際に発展途上国を訪れた同世代の話を聞き、日本にいと気づくことのできないような発展途上国の詳しい教育状況やコロナ下の支援状況について学ぶことができた。また、その話を踏まえてグループワークで現在の日本が抱えている問題にも触れたり、ボランティア実践において困難な点や課題についても議論することができ、新鮮だった。



企画学生が作成した東南アジアクイズの一部

7. 3 ボラカフェ・クリスマス報告

日 時	2020 年 12 月 18 日 (金) 第一部：11:30-13:00、第二部：14:00-15:00
場 所	ボランティアセンター (学生ラウンジ、花壇・畑)
目 的	新入生で大学になれず友人ができないといった学生たちが、ボランティアセンターに集うことで、学科や学年の枠を超えて交流をしながら、今後の学生生活について語り合う場をつくる。
参加者	学生 5 名 (内ゲスト 1 名)、教職員 3 名
企画学生	1 名
内 容	はじめに自己紹介を行ってから、ボランティアセンター横の花壇・畑へ移動。荒れ地を耕し腐葉土を混ぜ入れ、企画学生と職員が事前に購入した花を全体に植え付けた。花壇のデザインを考えながら、体を動かし、太陽光調理器を用いた焼き芋を食べるなど、学生同士も職員も共により交流の場となった。 次に、学生ラウンジにて、ボルネオ島の真珠を使ったアクセサリーを販売することで森林保全 NGO に寄付をしてきたサークル「MG パール」の学生をゲスト講師として、ボルネオに関する話を聞いたり、実際に手芸材料を使って「マスクチャーム」を作るワークショップを行った。
企画学生による感想	コロナ禍で横浜キャンパスに来る機会が少ない一年生などに他学科や違う学年とかわかることができる企画はできないかと考えた中で、戸塚ガーデンにお花を植えたり、MG パールを巻き込んで体験的にボランティアに触れたりと小規模ではあったが、ボランティアやボラセンの入り口になるような企画ができた。また、他学科の学生と交流が生まれ、参加した学生からは「このような企画に参加できてよかった」と言ってもらえることができ、今後も継続してやっていきたいと感じた。(学生コーディネーター、教育発達学科 3 年)



ボラセン横の畑に花を植える



ボルネオパールでマスクチャーム作り

8 夜のおうちでボラカフェ

「コロナと暮らし、ボランティアと正しさ」

■日時：2020年7月10日（金）19:00～21:00

■会場：Zoom オンライン

■主催：NPO 法人 ESUNE

■協力：明治学院大学ボランティアセンター

■参加者：24名（明治学院大生8名、ボラセンコーディネーター3名、静岡県立大生7名）

■ホスト：「ボランティアってなんだっけ？」から考える会

・斉藤雄大（NPO 法人 ESUNE 事務局長）

・松浦直矢（明治学院大学卒業生／NPO 法人 ESUNE）

■話題提供：

・猪瀬浩平（明治学院大学ボランティアセンターセンター長補佐）

■テキスト：

『ボランティアってなんだっけ？』（猪瀬浩平著、岩波ブックレット）

■内容：

卒業生である松浦さんが猪瀬先生の本の読書会をしていたことをきっかけに、静岡県立大学学生を中心とする NPO 法人 ESUNE とのコラボとして実現した。明治学院大学ボランティアセンターは学生参加募集の広報協力をし、コーディネーター3名が参加した。

初めに斉藤さんより ESUNE の紹介がなされた（やさしく、あたらしく、あなたらしくなる社会を理念として、ローカルプロジェクトのコーディネートと参画機会を創出している）。次に、猪瀬先生が本の内容を引き合いにしつつ、「ボランティアと正しさ」というテーマで話された。現在のコロナ禍におけるバッシングなどに触れ、社会の中で弱い立場に置かれる人々への視点と、一方で「公益」という名の下にボランティアを利用する組織や人々があることへも注意する必要があることが話された。

その後、ワールドカフェ方式で15分ずつ3回、テーマとメンバーを変えてグループトークが行われた。テーマの一回目は「猪瀬先生の話聞いて思ったこと」、二回目は「ボランティアや暮らしの中で直面した正しさや疑問」、三回目は「二回のグループトークを通して感じたこと」。最後に全体で共有し猪瀬先生よりコメントがあって終了した。

■所感：

コロナ禍がきっかけとなり、遠方の NPO や大学生と共にボランティアに関する学びの場をオンラインで設けることができた。ワールドカフェ方式は、メンバーを即座に変えながら対話を深めていく方法として、オンラインに適した方法であることが分かった。特に、学生と社会人とが、組織や距離を超えて自由に対話できたことも対話内容を深めていた。

（ボランティアコーディネーター 磯野昌子）



9 「ボランティア学」授業との連携について

2020 年度、ボランティアセンター（以下、ボラセンと略する）は、教養教育センターが開講する「ボランティア・市民活動論プログラム」への支援を行った。具体的には、このプログラムを構成する「ボランティア・市民活動論 1A」（猪瀬浩平担当／春学期）に、田口めぐみボランティア・コーディネーターが参加し、自身が長年かわる岐阜県下呂市の障がい者グループの活動を紹介した。その後、同授業では、田口コーディネーターの紹介で、「障害を持つ子と親の会ホープフルハーツ（以下、ホープフルハーツと略する）」の中島茂美会長がゲスト講演を行うとともに、授業時間を使い学生が、ホープフルハーツと、益田どんぐりの会（以下、どんぐりの会と略する）それぞれの会員に対するオンライン交流による、傾聴ボランティア体験を行った。以後、「ボランティア・市民活動実習」の授業を通じて、オンライン交流を合計で 4 回実施している。

このような授業でのボランティアの体験が、学生の自主的な活動も引き出している。

その一つに「りもぐるみ」の活動がある。コロナ禍のなかで旅行ができなくなった障害のある人に対して、その人の大切にしているぬいぐるみを代わりに旅行させるというこのプロジェクトは、ホープフルハーツやどんぐりの会と連携することで授業からスピノフする形で現実化した。ボラセンの職員のアドバイスを受けながら企画の見直しを行い、まずホープフルハーツの会員に対する活動が「いつボラ」として採択された。

企画を実際に実行すること、およびその経験を学問的に探究すること（たとえば、ぬいぐるみが旅行することにどんな哲学的、実存的意味があるのかへの問いかけ）の双方を、授業担当教員とボラセン職員（コーディネーター）がサポートした。学生にとっても大きな学びにつながっただけでなく、ボラセンにおいてもコロナ禍における学生のボランティア、およびその支援の在り方を考えるうえでの手がかりとなった。この活動の延長で「りもぐるみ」の学生たちはどんぐりの会やその他の障害当事者への支援も視野にいたれたプロジェクトを立案し、「ボラチャレ」としても採択されている。

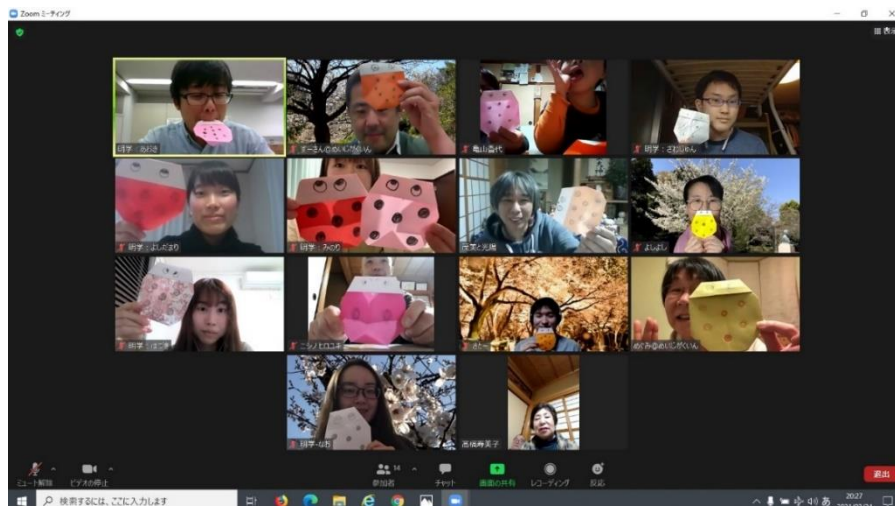
また、授業を通じて学生が、授業でのオンライン交流をほかの学生に体験してもらうために、1 Day for Others のリーダー学生としてプログラム「サクラサケ！オンラインでつながる交流の輪」の企画・運営を行った。3 月 3 日に開催された「地域での障がい者支援を知る」には 11 名、3 月 24 日に開催された「お花見交流会」には 5 名の学生が参加し、授業に引き続く形で、ホープフルハーツ、どんぐりの会の方々と交流した。

コロナ禍によって、春学期の授業は全面的にオンラインで実施された。そのことが大学教員のあり方として正しかったのかどうかは、引き続き検討が必要であろう。一方で、「ボランティア・市民活動プログラム」で行われた、授業とボラセンの連携は、オンライ

ンだからこそ今までよりも簡単にボラセン職員（コーディネーター）が授業に参加できるとともに、自身が大学から離れた場所で形成したネットワークやそこで培った経験を、授業に結び付けることができたともいえる。これはコロナ禍の中でのボランティアとしてだけでなく、今後オンラインでつながっていく世界（国内外にとどまらない）のなかでのボランティアやその支援を考えていくうえでの一歩にもなっている。

重要な点は、職員に、長年の現場での活動で培った経験知や、そこから深められた専門知、そしてそれを支えるネットワークがあったからこそ、オンラインを有効に利用でき、学生たちのアイデアを現実化できたともいえる。このような経験をほかの授業でも行うとともに、その実績を教職員に対して発信していくことも今後の課題になるだろう。

（明治学院大学教養教育センター教授、ボランティアセンター長補佐 猪瀬浩平）



「サクラサケ！オンラインでつながる交流の輪」の様子

10 「ジェンダーとメディア表現」イベントの開催

横浜市男女共同参画センターと、学生団体「海外プログラム事業部」（現ゆーとぴあ）の協力事業、「ジェンダーとメディア表現」は、2019 年度から引き続き、行う事業となった。もともと「学生の主体的な参加」を期待する男女共同参画センター側からの提案された企画だ。2020 年度は 2019 年度より、さらに学生が企画する部分が大きくなり、専門家によるシンポジウムの後のワークショップを開催、大成功だったと思う。特に、学生がミスコンに関わった経験から企画を立ち上げるという形で、学生のジェンダーに対する問題意識の高さに驚かされることになった。それがワークショップにも反映されていたと感じた。企画終了後も、さらなる活動が続けて、他の学生団体との連携を図るなど、目を見張る努力をしている。

今後についてもぜひこうした形を続けてもらいたい。問題の重要性を考えると、明治学院大学の学生を主にしながらも、他大学の多くの学生を巻き込んだ形になると、より発展的な形になるものと期待している。

（企画・監修：明治学院大学教養教育センター准教授 長谷部美佳）

■概要

- ・開催日時 2020 年 11 月 30 日(月) 15:30-17:30
- ・場所 横浜市男女共同参画センター横浜 ホール
- ・主催・協力団体 共催：（公財）横浜市男女共同参画推進協会
明治学院大学（学生団体）海外プログラム事業部
協力：明治学院大学ボランティアセンター
企画監修：長谷部美佳（明治学院大学教養教育センター准教授）
- ・参加人数（内訳）全参加者数 42 人（関係者含む）
学生参加者数 31 人（その内実行委員メンバー9 人）
- ・目的 身近な題材から、ジェンダーとそのメディア表現について考える機会を作りたい

■内容

<第一部 講演>

第一部では、北村紗衣さん（武蔵大学准教授・ウィキペディアン）と三島あずささん（朝日新聞社会部記者）の 2 人をゲストとして呼びし、各約 30 分ずつの講演会を行った。北村さんはウィキペディアのジェンダーギャップや編集方法について、三島さんは自身の新聞社での半生と「Dear Girls」立ち上げについてお話しいただき、その内容はどれもメディアとジェンダーの関わりという点でとても興味深いものであった。

<第二部 ワークショップ>

第二部では、私たち海外プログラム事業部のメンバーが中心で、ミスコン・ミスターコン

について考える、というワークショップを行った。まず個人ワークとして「大学のミス/ミスターコンでグランプリ（優勝）を取る人は、どんな人ですか？」という問いについて考えてもらい、それぞれ自分の意見をグループに共有した。その後、グループで「結局、ミスコンでは何を競っているのか？何を競わされているのか？」という問いについて話し合う、という形をとった。グループ内で出た意見は、ポストイット形式でまとめるようにしたので、多種多様な意見の客観視がしやすく、意見のカテゴライズもしやすかったように思う。ミスコンについて考えるグループとミスターコンについて考えるグループとで半々に分けてディスカッションをしてもらったので、その点も最後の全体での意見共有の際に可視化がしやすかった印象がある。

各グループから様々な意見が出ていたのを簡単に紹介すると、ミスコンについては、女らしさ、自身のコンサルティング力、理想の彼女像、などが競わされているのではないかという意見があった。ミスターコンについては、男らしさ、外見、モテる男か、などが競わされているのではないかという意見があった。両方に共通するものとしては、内面はあまり見られていないのではないか、社交性が大事、SNSなどのめめさ、などが重視されているという意見もあった。どのグループも模造紙には大量の付箋が貼られており、内面、見た目、アピール力、などカテゴライズの仕方もグループによって違う部分もまた、面白かった。

<企画学生によるプレゼンテーション>



第二部のワークショップのまとめとして、私たちがなぜこの『ミスコン・ミスターコンについて考える』というワーク内容を選んだのか、ミスコン・ミスターコンの女らしさ・男らしさを押しつけてしまっている現状と、ジェンダー的な観点から見た時の問題点を挙げ、近年注目されている新しい形のミスコン・ミスターコンについても紹介した。今までのワークショップでの意見やミスコン・ミスターコンを取り巻く

新しい動きを踏まえた上で、どんなミスコン・ミスターコンが良いのか、考える機会になれば嬉しいと、私たちジェンダーセクションのメンバーは思っている。

社会にはたくさんのジェンダー問題が潜んでおり、そのようなステレオタイプの押しつけに苦しんでいるひとは大勢いると思う。ミスコン・ミスターコンの一番の問題点は、そのステレオタイプによって個性を潰してしまっていることであり、そのステレオタイプというフィールドでしか戦えないような形式になっていることなのではないだろうか。もっと一人ひとりが個性を出せるようなミスコン・ミスターコンになれば良いし、社会も同様にそうなれば良いと思う、持論ではあるが、このようなまとめで第二部を締めることとした。

■ふりかえり

このイベントは本番こそ11月下旬であるが、動き出したのはゴールデンウィークが開けて、1年生が正式に所属すると決まったあたりであった。そこから数々のメールや打ち合わせを経て、何度も内容を練り直し、時には深夜までメンバーでミーティングを重ね、準備には相当な時間がかかった。しかし、それもすべてイベント当日を成功させるためであり、胸を張って頑張ったと言えるくらいに準備を重ねたおかげで、当日は目立ったトラブルもなく進めることができた。昨年と違い、私たち学生が中心のワークショップが内容の半分以上を占めたため、その分、企画内容の話し合いについては相当な時間を有したが、これもまた、ジェンダー問題について客観的に考える良い機会になったと感じる。

本当に、一年間を通して取り組んだと言えるイベントであり、私たちが得られたものは数え切れないほどある。しかし一番は、普段はジェンダーセクションという狭い繋がりの中で話合っていたジェンダー問題について、他の明治学院大学の学生や、他大学の学生など、いつもとは違う関わりの中でディスカッションをするという経験が、大きな収穫なのではないかと思う。ジェンダー問題というものは、なかなか日常生活で友人などと話しやすい話題ではないため、改めてジェンダー問題についてディスカッションする場を作ることの大切さを感じた。

(明治学院大学(学生団体)海外プログラム事業部、ジェンダーセクション代表、消費情報環境法学科2年)



横浜市男女共同参画センター横浜 ホールにて

11 大学生による国際協力（オンラインで横につながる・仲間を作る）

■日時：2020年10月18日、25日（日）15:30-17:00

■会場：Zoom オンライン

■主催：大学教職員有志一同（藤掛洋子：横浜国立大学教授、秋吉恵：立命館大学准教授、田中仁：大学生協中国四国事業連合、磯野昌子：明治学院大学ボランティアコーディネーター）、学生（名桜大学）

■応援：ミタイ・ミタクニヤイ子ども基金

■参加者：約20名（横浜国立大学、立命館大学、明治学院大学、名桜大学の学生と教職員）

■内容：

8月にオンラインで開催された「大学教育における海外体験学習研究会：JOELN」のセミナーにおける分科会から発展し、これまで大学や市民団体を通じて学生と共に国際協力に携わってきた教職員有志によるオンライン・イベントを企画実施した。コロナ禍によって海外渡航ができない中、オンラインで横につながぐことで、国際協力に関心をもつ大学生や教職員が大学の壁を越えて互いに交流し、それぞれの活動やコロナ禍でできる国際協力についての意見交換を行なった。

一回目は、主に教職員側から各自がこれまでに活動してきたことを発表した。横浜国大藤掛教授はパラグアイと、立命館大秋吉准教授はネパールと、大学生協田中氏はオーストラリアと交流しながら実践的学びを作ってきた。私自身は、個人的に活動している逗子市でのフェアトレードタウン活動について報告したところ、コロナ禍でも国内でできる国際協力活動としてのフェアトレード活動に関心が集まった。そこで翌週の二回目では、逗子市のフェアトレードスクールを目指して活動している高校生や教員も加わり、各地の高校生や大学生によるコロナ禍中でのフェアトレード活動や国際協力活動の報告、立命館大で学生が開始した学生のための食糧支援の取り組みについても報告された。

（ボランティアコーディネーター 磯野昌子）

募集！大学生による国際協力
ーオンラインで横につながる・仲間を作るー

日時
10月18日・25日（日）
15:30～17:00

開催方法
zoom
(当日メールにリンクを
配信します)
定員：50名まで

1日目（18日）
教職員4名による国際協力プレゼン+希望
学生による実践事例の紹介
各自が関わってきた教育・研究・市民活
動についてディスカッション

2日目（25日）
希望学生によるプレゼン+1日目の話題提供
やグループワークを経て新しいプログラムを
学生が提案・修正

教職員：藤掛洋子（横浜国立大学 教授）
秋吉恵（立命館大学 准教授）
田中仁（大学生協 中国四国事業連合）
磯野昌子（明治学院大学 ボランティアコーディネーター）

司会者：川辺夏奈子（名桜大学 学生）

主催：教職員有志一同、応援団：特選ミタイ・ミタクニヤイ子ども基金

参加申込はこちらから！→

12 第27回大学教育研究フォーラム 企画セッション

市民とつながる海外体験学習～オンライン実践からこれからの体験学習を考える

■日時：2021年3月17日（水）12:30-15:00

■場所：オンライン Zoom

■主催：大学教育研究フォーラム実行委員会

共催：京都大学高等教育研究開発推進センター、京大オリジナル株式会社

■話題提供者：秋吉恵 立命館大学／(特活)シャプラニール＝市民による海外協力の会

話題提供者：横浜国立大学 藤掛洋子／(特活)ミタイ・ミタクニヤイ子ども基金

話題提供者：立教大学 小峯茂嗣／アフリカノオト

指定討論者：田中治彦 上智大学

司会進行：明治学院大学 磯野昌子／逗子フェアトレードタウンの会

■内容：

10月にオンライン・イベントを共催した教職員有志がさらに研究や学びを深めるために、大学教育研究フォーラムで企画セッションを行った。本年度の大学教育研究フォーラムでは、コロナ禍によって多大な影響を受けた大学教育におけるオンライン実践の報告が大半を占めた。特に、オンラインで学生の主体的な学びをどのように保障するのかなど、ポストコロナ時代に向けた新しい大学教育の仕組みを創る必要性が論じられた。

私自身が司会進行を務めた企画セッション「市民とつながる海外体験学習～オンライン実践からこれからの体験学習を考える」では、3つの大学（立命館大学、横浜市立大学、立教大学）の各教員がそれぞれ NGO や NPO と連携することでヴァーチャルなスタディツアーを行った事例が報告された。

指定討論者の田中治彦教授は、従来の海外体験は、学生が海外に行くか、海外からゲストを招聘するかであったが、オンラインによるヴァーチャルな海外体験学習は、両者の間に位置する第三の学びのスタイルであり、海外の住民と対等にオンラインの場で出会える点で、従来は一方的になりがちであった海外体験学習を超える可能性がある、とのコメントがなされた。

オンラインでの学びが、単なる従来の体験学習の代替ではなく、新たな可能性を秘めた第三の学びのスタイルである、という視点には大いに励まされた。今後も、他大学の先生方と連携しながら、学生のよりよい体験学習のあり方を探っていきたい。

（ボランティアコーディネーター 磯野昌子）

13 国際機関実務体験プログラム（2020 年度中止）

横浜・みなとみらい地区の国際機関で 100 時間の実務体験を行うプログラムで、公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）と本学を含めた 6 大学との協働事業となっている。

国際協力や国際交流の実務を体験することにより、大学で習得した学問と実務機関での実践の融合をはかり、将来、国際性豊かな資質を持ち世界的な問題を視野に入れて活動することができる人材育成を目的とする。

本学ではボランティアセンターが窓口となり、2004 年度より同プログラムを学生に案内公募し選考の上、参加の機会を創出してきたが、2020 年度はコロナ禍のために、夏期・春期とも中止となった。プログラムは実施されなかったが、同プログラムの事務局となっている YOKE を中心に 6 大学の担当者と共に、全 7 回に及ぶ話し合いがオンラインで行われ、従来のプログラムの見直しと改善が行われた。特に、これまで大学と YOKE 間では基本協定を締結していたが、YOKE と各国際機関との間では協定がなかったため、基本協定案が作成された。また、参加する学生個人と国際機関との間でも覚書を交わすこととし、その原案が作成された。

2021 年度も夏期プログラムについては中止が決定されているが、コロナ禍の状況を鑑みながら春期に向けて準備を進めることとなった。

（ボランティアコーディネーター 磯野昌子）

II. ボランティアセンター資料

ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま

- ・ 明治学院大学保証人会
- ・ 明治学院同窓会ウィメンズクラブ「くらら会」
- ・ 個人 1 名（氏名非公表）

上記の皆さまよりご支援を頂戴しました。

2020 年度マスコミ報道一覧

日付	媒体名	内容
12 月 11 日	岐阜新聞：飛騨版	授業「ボランティア・市民活動論」（猪瀬浩平 教養教育センター教授）を履修する学生たちと下呂市内の障害者 15 家族のオンラインクリスマス会



2020 年度 各委員一覧

ボランティアセンター運営委員

永野 茂洋 (副学長) 【委員長】
安藤 聡 (文学部)
岡本 実哲 (経済学部)
米澤 旦 (社会学部)
西村 万里子 (法学部)
頼 俊輔 (国際学部)
野村 信威 (心理学部)
長谷部 美佳 (教養教育センター)
坂口 緑 (宗教部長)
小林 潤一郎 (教務部長)
宮本 聡介 (学生部長)
武村 美津代 (事務局長)
小川 文昭 (センター長)
猪瀬 浩平 (センター長補佐)
林 公則 (センター長補佐)
磯野 昌子 (ボランティアコーディネーター)
菅沼 彰宏 (ボランティアコーディネーター)
田口 めぐみ (ボランティアコーディネーター)

ボランティアセンタースタッフ

小川 文昭 (センター長)
猪瀬 浩平 (センター長補佐)
林 公則 (センター長補佐)
波多野 洋行 (次長)
磯野 昌子 (ボランティアコーディネーター)
菅沼 彰宏 (ボランティアコーディネーター)
田口 めぐみ (ボランティアコーディネーター)
高橋 千尋 (課長)
金子 美咲
瀬下 幸恵
青木 洋治
大野 洋子
林 志津子

ボランティア活動推進委員

小川 文昭 (センター長) 【委員長】
高倉 誠一 (社会学部)
植木 献 (教養教育センター)
長谷部 美佳 (教養教育センター)
可部 州彦 (有識者)
谷口 浩一 (学外有識者)
唐木 富士子 (学外有識者)
原田 勝広 (学外有識者)
黒澤 友貴 (学外有識者)
猪瀬 浩平 (センター長補佐)
林 公則 (センター長補佐)
磯野 昌子 (ボランティアコーディネーター)
菅沼 彰宏 (ボランティアコーディネーター)
田口 めぐみ (ボランティアコーディネーター)

明治学院大学ボランティアセンター規程

2001年 7月18日	大学評議会承認
2004年 5月19日	大学評議会承認
2004年10月20日	大学評議会承認
2005年10月 7日	常務理事会承認
2005年12月 9日	常務理事会承認
2006年 1月13日	常務理事会承認
2006年 7月14日	常務理事会承認
2010年 3月12日	常務理事会承認
2014年 3月14日	常務理事会承認
2018年 5月11日	常務理事会承認

(設置)

第1条 明治学院大学(以下、「本学」という。)に明治学院大学ボランティアセンター(以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、共通教育機関として、「他者への貢献」(Do for Others)の精神にのっとり、ボランティア活動を通じた人間教育を行うことを以て目的とする。

(業務)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、以下の業務を行う。

- (1) サービス・ラーニングプログラムの企画、実施
- (2) 学生等に対するボランティアの立ち上げなど、学生の自主的活動の支援と助言
- (3) 地域や国際社会への貢献を目指し、社会との協働によるボランティアプログラムの開発
- (4) 学内外のボランティア活動に関する情報収集と学生への提供及び相談への対応
- (5) 教職員への情報提供とボランティア活動参加に関する機会提供
- (6) 本学におけるボランティア関連科目に関する協力
- (7) その他、学生等のボランティア活動の促進に必要な業務

(活動)

第4条 センターは、第2条の目的を達成するため、以下の学生の活動を支援する。

- (1) キャンパス周辺の地域に貢献する活動
- (2) ボランティア入門プログラムに伴う活動
- (3) 地震、津波、台風、洪水など自然災害に伴う被災地支援活動
- (4) 海外でのボランティア等に関する活動
- (5) 学外の人道支援機関、特定非営利活動法人(NPO)、企業等との連携活動
- (6) ボランティア参加への啓発活動
- (7) その他

(運営委員会規程)

第5条 センターの組織および運営に関する重要事項を審議するため、明治学院大学ボランティアセン

ター運営委員会を置く。

2 センター運営委員会規程は、これを別に定める。

(構成)

第6条 センターには次の職員を置くことができる。

- (1) センター長 1名
 - (2) センター長補佐 若干名
 - (3) ボランティアコーディネーター 若干名
 - (4) 非常勤ボランティアコーディネーター 若干名
 - (5) 事務職員 若干名
- (センター長)

第7条 センター長は本学専任教員の中から、学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 センター長は、センターの業務を統括する。

(センター長補佐)

第8条 センター長補佐は、本学専任教員の中から、センター長の推薦に基づき学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 センター長補佐は、センター長の業務を補佐する。

(ボランティアコーディネーター)

第9条 ボランティアコーディネーターの任用等は、「ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

2 非常勤ボランティアコーディネーターの任用等は、「非常勤ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

(評価・評価委員会)

第10条 ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長の設置する評価委員会による評価を受ける。センター長は、その結果を学長に報告する。

2 非常勤ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長が設置する評価委員会による評価を受ける。センター長はその結果を学長に報告する。

3 前2項に基づき設置する評価委員会は、副学長、学生部長、センター長、センター長補佐、大学事務局長、その他センター長が指名し運営委員会の承認を得た者から構成する。

(活動推進委員会)

第11条 センターに、その事業の円滑な遂行を図るためボランティア活動推進委員会（以下「推進委員会」という。）を置く。

2 推進委員会は、センター長の諮問に応じて助言または提案を行い、推進委員によって構成される。

3 前項の推進委員は、ボランティア活動に識見を有する専任教職員、学生等、およびボランティア活動についての学外の有識者・実務家（若干名）からなり、その任期は2年とし、再任を妨げない。専任教職員にあっては、所属長の推薦により、その他の者にあっては運営委員会の議を経て、センター長が委嘱する。

4 センター長は、必要に応じて推進委員以外の者を陪席させることができる。

(学生メンバー)

第12条 センターの業務の遂行にあたって、センター長は、学生の参加と協力を求めることができる。

(規程の改廃)

第13条 本規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て大学評議会および常務理事会の承認を得なければならない。

付 則

- 1 この規程は、2001年7月18日から施行する。
- 2 この規程の施行により、「明治学院大学ボランティア・センター暫定規程」は廃止する。
- 3 2002年4月1日一部改正施行（第3条第2項、教養教育センター設置による。）
- 4 2004年4月1日一部改正施行（第3条法務職研究科設置および委員にセンター長補佐追加による。）
- 5 2004年8月1日一部改正施行（第4条ボランティア・コーディネーター、事務職員数の変更による。）
- 6 2005年11月1日一部改正施行（第7条ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。第8条評価・評価委員会、新設）
- 7 2006年1月1日一部改正施行（コーディネーターを運営委員会委員とする。非常勤コーディネーターを新設する。）
- 8 2006年1月1日一部改正施行（第7条2項非常勤ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。）
- 9 2006年4月1日一部改正施行（第3条事務局職制変更による）
- 10 2010年4月1日一部改正施行（基本理念作成委員会の答申に基づき、第2条目的および第3条業務を見直し、第4条運営委員会規程を別途新設し本規程から削除、第5条センター長補佐の人数を変更、第7条センター長補佐は専任教員の中から選する、第9条2項に非常勤ボランティアコーディネーターの評価を明記、3項の評価委員会構成メンバーにセンター長補佐を追加、第10条4項推進委員会参加メンバーを弾力化する条文を追加）。
- 11 この規程は、2014年4月1日から施行する。（第3条3項、第4条学生の活動内容の追加、第5条3項の削除、第11条2項、第11条3項推進委員の学外有識者・実務家を2名から若干名へ変更、第12条見出し変更）
- 12 この規程は、2018年5月11日から施行する。（第6条ボランティアコーディネーターの人数変更、第10条評価を受ける周期の変更）

明治学院大学ボランティアセンター報告書 第17号 2020

発 行 2021 年 6 月

発 行 者 明治学院大学ボランティアセンター

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

明治学院大学白金キャンパス 10 号館 1F

TEL 03-5421-5131 FAX 03-5421-5144

〒244-8539 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町 1518

明治学院大学横浜キャンパス 4 号館 1F

TEL・FAX 045-863-2056

E-mail voluntee@mail.meijigakuin.ac.jp

<https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteer/>

印 刷 社会福祉法人東京コロニー コロニー印刷

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売、
ネットワークにより転送することを禁じます。

